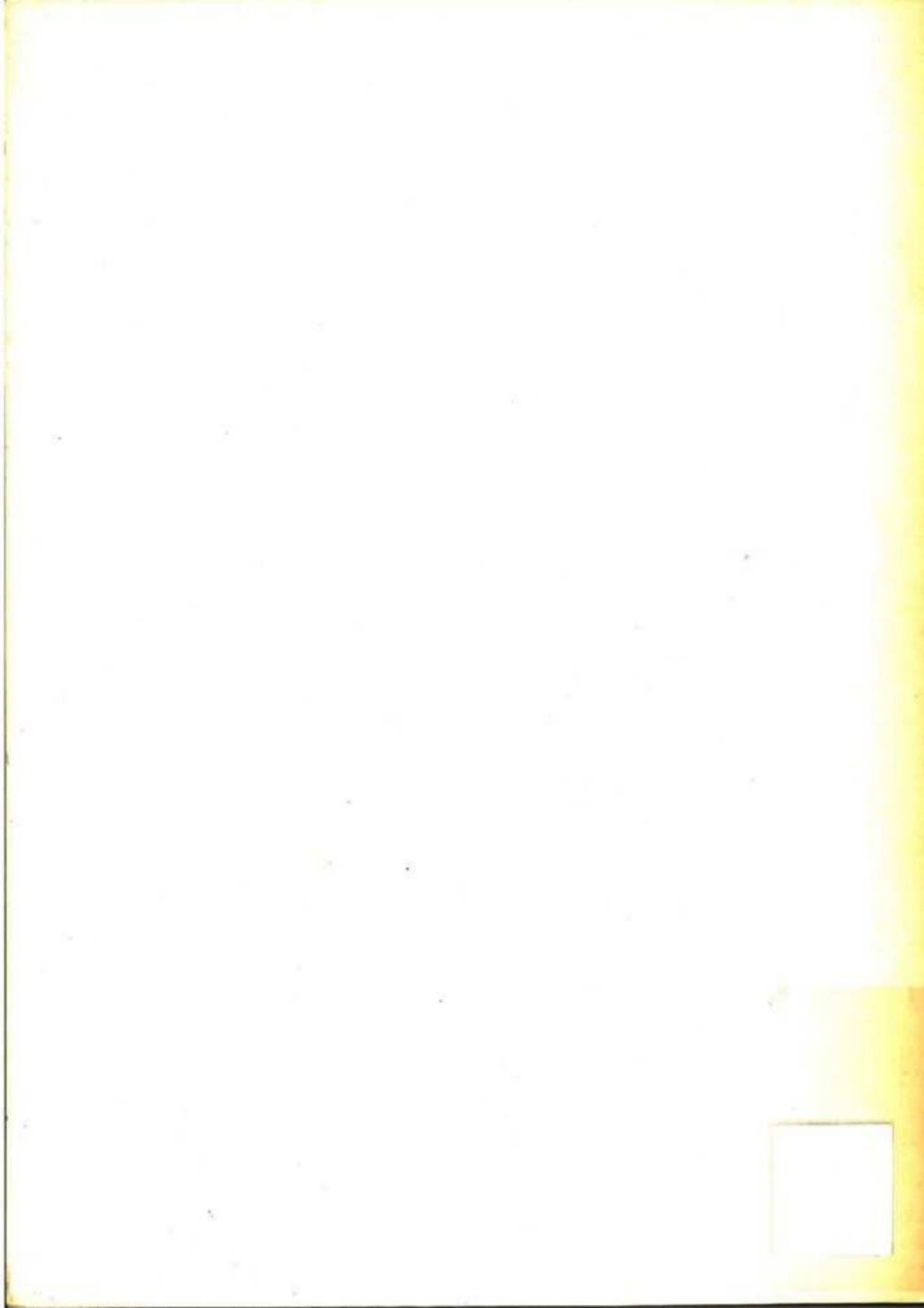


伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ

昭和54年3月

伊丹市文化財保存協会



伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ正誤表

頁	図及土器番号	行・欄	誤	正
序		15	報告書の完成を <u>真</u> 近にした	報告書の完成を間近にした
1		13	さまざま <u>__</u> な形で	さまざまな形で
5		10	瓦 <u>博</u> を利用した	瓦埴を利用した
21	土器番号8	形態の特徴	<u>__</u> がる。	上がる。
58	図版10下	青磁・染付	120	119
◇	◇	◇	119	120

序

昭和50年度以来、3カ年にわたり、国鉄伊丹駅前整備事業の推進にともない、駅前広場の予定地区について、伊丹城跡の遺構確認のための発掘調査を実施してきました。これらの調査で、伊丹城跡・右岡城跡の貴重な遺構および多数の遺物を検出しました。さまざまな成果を前にし、市民のみなさんをはじめ市内外のさまざまなご意見を得て、昭和53年1月この地域を中心とする旧右岡城跡（伊丹郷町をふくむ）について、国の史跡に指定されるように、伊丹市は文化庁に申請しました。

昭和53年度は、地元の田中幸夫氏のご好意により、これまでの調査区域にほぼ隣接し、外城の西南隅付近と想定される区域の発掘調査を行うことになりました。その成果は、本報告書に記される通りです。当初の想定と異なった遺構の状況は、さらに新たな研究課題への発展を生みつつあります。それらの解明は、旧右岡城域に相当する伊丹郷町全域の本格的調査が将来進められることによって実現されましょう。

このたびの調査に当っては、ひきつづき調査の指導に当たられた鈴木 充教授、調査現場での作業の中心的役割を担われた浅岡俊夫氏および学生諸君、また調査の便宜をはかっていただいた土地所有者の田中幸夫氏をはじめ地元の方々、その他関係者の方々に厚く謝意を表します。

報告書の完成を真近にした、さる3月16日に文化財保護審議会は文部大臣に対し、右岡城跡を史跡に指定するよう答申しました。早くより伊丹城跡の保存を説かれた多くの諸先輩の努力と志の一端が、漸くここに報われる見通しがついたことを大いに喜びたいものです。それとともに、本格的な保存への努力は後人たる私たちに課せられた大いなる義務として改めて痛感し、微力を尽くしたいと思っている次第です。

昭和54年3月31日

伊丹市教育長 佐 坂 茂 男

目 次

I 発掘調査の経過	1
1. 調査の組織	
2. 調査の経過	
II 遺構の解説	4
1. 調査地区	
2. 調査の状況	
III 遺 物	13
IV ま と め	17
伊丹城惣構えについて	19
遺物観察表	20

図・図版目次

図1 伊丹城惣構えの図	3
図2 調査地区図	8
図3 伊丹城跡第4次発掘調査全域図	10
図4 土埴・建物遺構実測図	11
図5 溝状遺構実測図	12
図6～11 遺物実測図	43
図版1 伊丹城惣構え航空写真	49
図版2～5 遺構写真	50
図版6～10 遺物写真	54

凡 例

本報告書は伊丹市教育委員会が国庫および県費補助金 400万円（国 200万円、県 100万円、市 100万円）を得て発掘調査を実施した昭和53年度伊丹城跡発掘調査の報告書である。

本報告書の執筆は伊丹城跡調査団が担当した。Iを橋本久・浅岡俊夫、II・III・IVを浅岡が執筆し、図は浅岡、寺川和広が作成し、写真は遺跡・遺物とも浅岡が撮影した。また、原稿作成の段階で、伊丹市立博物館のさまざまな協力を得た。

伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ

I 発掘調査の経過

1. 調査の組織

伊丹城跡第4次発掘調査は、昭和53年度に国庫補助金400万円（国200万円、県100万円、市100万円）を得て、伊丹市教育委員会が行った。調査にあたっては、調査委員に鈴木 充（広島大学教授）を委嘱し、調査員として伊井孝雄（大阪教育大学付属高校教員）・橋本 久（大阪経済法科大学助教授）・浅岡俊夫の参加を得、遺物整理については、寺川和広（奈良大学）・田中 一（竜谷大学）らの応援を得て浅岡俊夫が行った。また、事務局は伊丹市教育委員会社会教育課（課長末宗 昇・係長木原 務・主任坂根憲治）が担当した。調査は市立伊丹高校教諭小西規雄・浪速高校教諭中島正善・尼崎市立塚口中学校教諭井口 正及び奈良大学・竜谷大学・大阪教育大学生などの手によって行ったが、伊丹市建設部都市整備課・伊丹市文化財保存協会・地元の大手町自治会（会長吉田昌功）・株式会社橋本工務店および森山建設などの協力を得、特に地主田中幸夫氏からはさまざまな形で協力・援助を受けた。また、写真現像焼付については特に広報課京谷暢夫氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

調査参加者 新井裕子・岩木尚子・大槻和美・岸川孝幸・合田幸美・佐々木博美・嶋 幾代・中島由美子・橋本佳子・初山裕子・半澤恵子・広岡光子・光田藤一・宮崎 学・六車 徹・吉岡康子（以上大阪教育大学）、紫合正人（大阪産業大学）、木原 緑（甲南女子短期大学）、生地 孝（神戸大学）、田中恵二（神戸商科大学）、猪坂幸司（同志社大学）、岸本兼英・寺川和広（以上奈良大学）、伊井直比呂（広島大学）、田中 一（竜谷大学）、赤尾昌子（主婦）、兼田浩和・高石朋子・山田 浩（以上大阪教育大学付属池田高校）、木原由紀子（夙川学院高校）大木本貞人（大阪学院大学）

2. 調査の経過

第4次発掘調査の対象地は、国鉄伊丹駅から阪急伊丹駅に通じる県道伊丹停車場線の南側に隣接する住宅地の中にあたり、第1次調査地の西側、第3次調査地の西南側にあたる。地番は伊丹市伊丹2丁目597-1、598-1で、田中幸夫氏の所有地で、鈴木 充が伊丹城跡を復元研究し外堀の西南隅部及び西南郭部分にあたる地区に位置する。⁽¹⁾

発掘調査にあたって、外堀検出作業が今回の最重要点と予想されたので、本調査での計画や方針をたてるために、6月12日から6月13日の2日間にわたって土層等の確認調査を実施した。その結果、地表下約40～50cmは表土及び攪乱土層で、その下に地山及び第2次堆積土層を確認し、地山直上からは伊丹城時代の土器等を検出した。しかし、最重要点にしていた外堀については当調査地には存しないことが判った。

この確認調査の結果にもとづいて、本調査では厚さ40～50cmの表土・攪乱土層をパワーシャ

ベルで掘削したのち、手掘り作業を行った。調査期間は、7月13日から9月10日まで約2か月間を要した。作業の進行状況は、おおむね下記の通りである。

7月13日 発掘作業機材を現地へ運搬及び作業の打合せ。

14日 樹木・草刈り。

15日～18日 重機による表土・攪乱土掘削。

18日～19日 表土掘削完了後、N10°Eを主軸に4m間隔及び第1トレンチの地区設定。

20日～21日 調査地区全域を清掃。第1トレンチ南壁にて近代の骨壺を検出し、実測、写真撮影を行う。

22日～26日 備前焼大甕を埋め込んだ土壇（土壇-1）を検出し、実測、写真撮影を行う。

25日 文化庁仲野主任文化財調査官及び県教委田中参事他伊丹城跡を現地視察。

27日～8月1日 後世の攪乱激しく、ゴミ溜土壇や井戸及び防空壕などの発掘を行う。

8月2日～3日 第2・3トレンチを田中幸夫氏所有の納屋の中に設定し、発掘を行う。やはり、後世の攪乱激しい。

4日～9日 溝状遺構などを検出し、その発掘を行う。

10日 瓦罫を利用した建物跡を検出し、建-1と命名する。

11日 第1トレンチプラン実測及び第2・3トレンチの断面実測。

12日 溝-3・4を完掘。

13日～18日 調査地区の断面実測。

19日 調査地区の主な遺構の平板測量（1/100）を行う。

20日 遺構のプラン実測開始。現地説明会の資料作成。

21日～22日 建-1を発掘開始。及び、溝状遺構の写真撮影。

22日 市長、現地視察。

23日 遺構発掘完了。

24日 調査地区の全域等の写真撮影。

25日 遺構実測続行とともに、遺物洗浄を開始。

26日 午後、現地説明会を開催。参加者約90名。遺物洗浄完了。

28日～9月1日 遺構・土層断面実測、及び遺構の写真撮影。

9月2日 発掘機材撤収。

4日 出土遺物を博物館へ搬入。

9日～10日 遺構面に砂を入れ、調査地を埋め戻す。現地調査完了。

なお、出土した遺物は博物館へ搬入後、博物館にて報告書作成のため整理・実測・写真撮影を行ない、同時に遺構実測図等の整理も行った。

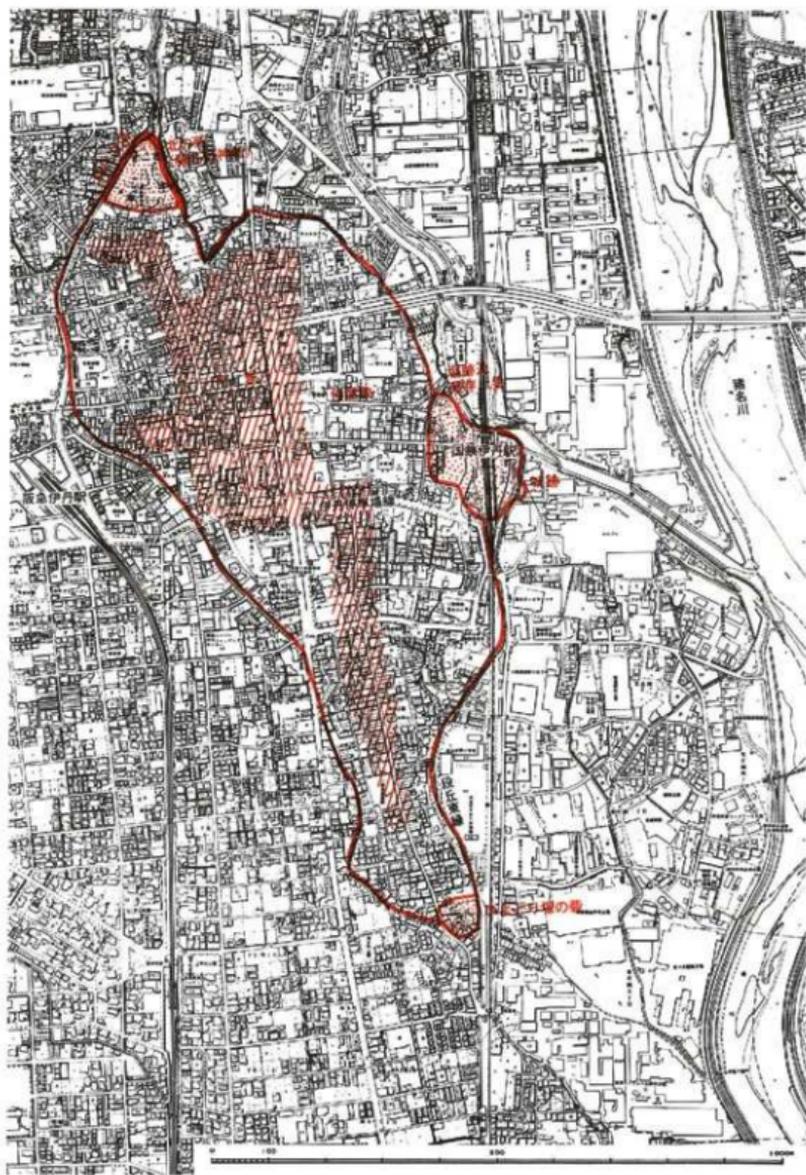


図1 伊丹城惣構えの図 (鈴木 充 復元図による。19頁「伊丹城惣構えについて」参照)

II 遺構の解説

1. 調査地区

伊丹城は、天正11年（1583年）に豊臣秀吉の直轄領になるとともに荒廃の一途をたどった。土塁は崩され、堀は埋めたてられ、住宅化が進んだ。さらには阪鶴鉄道（現国鉄福知山線）や工場建設のために伊丹城跡の東半分は削平され、完全に破壊されてしまった。西半分も住宅が所狭しと建並び、伊丹城の形態・規模すら判らないまでになっている。今では西北隅部分に土塁と堀の痕跡が一部残っていることが、伊丹城跡の存在を誇示しているようである。

ところで、昭和47年の伊丹市立博物館開館に際して、古い伊丹の町並——伊丹郷町の調査とその模型製作が行われた。その調査には鈴木 充があたり、散在していた古文書や古絵図から伊丹城跡の形態や規模について調査研究をし、その成果を『地域研究いたみ』に「伊丹城」として発表した。この論文は、伊丹城跡を概観するうえで唯一の文献であり、伊丹城跡の発掘調査や研究を行う場合の目安となっている。

また、福知山線複線電化に伴う国鉄伊丹駅前整備事業計画に関連して、伊丹市は上記の成果をもとに伊丹城跡の保護を行うべく、昨年度までに3次⁽¹⁾にわたって発掘調査を施行し、予想外の成果をおさめた。その結果、伊丹市は伊丹城跡の永久保存のため、鈴木 充の研究と発掘調査の成果をもとに史跡指定を申請することに決定した。

これに伴い伊丹市は、伊丹城跡の形態・規模をさらに明確にするため、西南隅部に推定されている場所の発掘調査を施行することにした。すなわち、昭和53年度に第4次発掘調査としてとりあげた地区は、鈴木 充の復元推定した伊丹城跡の西南隅部分、正確にはH状の内堀で4区画に区分された郭（くるわ）のうちの西南部に位置する郭と、それらの郭を取巻く外堀の西南隅のコーナーの部分にあたる。

この部分は、田中幸夫氏の所有地でT字状を呈し、総面積は約780㎡である。しかし、その一角には納屋が建っており、発掘調査面積は375㎡と約半分にとどまった。なお、田中氏の御好意により、納屋の中にも幅1.5m×長さ10mのトレンチ（第2・3トレンチ）を設定できた。

2. 調査の状況

○土層

伊丹城跡は荒廃がはなはだしく、第1次から第3次までの発掘調査でもわかるように遺構の全容をほとんど把握できないまでに攪乱されている。第4次調査地区においても例外ではなく、地表下約40～60cmまでは近現代までの攪乱土層が全面に広がっていた。さらに、調査地全域にわたって江戸時代以降の瓦や陶器類を捨てたゴミ溜土壇や井戸、建物のコンクリート基礎や防空壕など無数の土壇が掘り込まれ、地山面は月の表面のようにアバタ状に荒らされていた。

それは、伊丹城が廃城したのち、その荒廃がはなはだしかったことを裏付けると同時に、遺構検

出や土器の取上げを困難にさせた。

攪乱土層下の土層の状況については、溝-3の左右兩岸の肩口を境にちがいを認めた。溝-3より北側の地区においては攪乱土層直下が地山になるが、南側の地区においては攪乱土層下に灰褐色砂泥、褐色砂泥、淡褐色砂泥、暗黄褐色砂泥、黄褐色砂泥などの土層が地山まで数層堆積している。

この南側の地区においても北側地区と同様のレベルで部分的に地山の起伏が認められる。このことから、それらの堆積土は何回も攪乱を受けては整地されたり返しの結果であろうと推測できる。

○遺構について

第4次調査の主目的を伊丹城跡南西隅部の外堀の検出におき、伊丹城跡の主体部の範囲およびその形態の追究に主眼点をおいた。しかし、主目的とした外堀は検出されず、南側地区で東西および南北にはする大小さまざまな溝状遺構（溝-1～溝-12）と、北側地区での瓦罫を利用した建物遺構（建-1）並びに備前焼大甕を埋設した土壇（土壇-1）が主な遺構であった。これらの遺構は、その出土遺物や切り込まれた土層から鑑みて伊丹城時代のものである。

建-1（図4下・図版3）

本調査地区の最北端近くで検出した瓦罫利用の建物跡で、ほぼ西北から東南方向に長軸をもっている。

この建物の南から西側にかけては後世のゴミ溜め土壇で大きく攪乱され、北東部は防空壕によって破壊されていたため、建物の東南隅部から南縁側の一部と東縁側のラインおよび、北縁側ラインを検出した。しかし、確認した建物のコーナーは東南隅の一角のみであり、この建物の規模については推測の域を脱し得ない。

この建物は、周囲に20～25cm幅のL字溝をめぐらし、その溝の内法面に瓦罫を立て並べた土台をもつものであり、検出した遺構はその土台部分である。溝は瓦罫を立て並べたのち埋められていた。ただ、東南隅部から南縁側ラインにかけてはコブシ大のグリ石を詰めている。もともと瓦罫は、溝の内法面に全面に立て並べられていたと思われるが、検出時には大部分が欠除していた。瓦罫の残存状態の良好な所は東南隅部付近であった。

現存していた部分の計数については、南縁側は東南隅部から150cmを計り、東縁側は東南隅部から溝の内側で440cm、外側で465cmを、北縁側は360cmをはかった。東北隅部は防空壕で破壊されているため、その復元を試みると溝の内側で東南隅部から445～450cm、外側で480cm位の位置に落着く。北縁側についても復元した東北隅部から西北隅にかけて検出した溝の長さは、溝の外側の計測で約540cmである。

このような形態の建物は、同時代の城跡に2・3例があり、そのうち姫路市御着城跡のものについてはその規模がほぼ一致することが判明した。

この建物に使用された瓦罫は、幅が22.4～23cm⁽³⁾で、23cm位のものが一般的であった。高さについては、地山が削平されたらしく10～13cmを残すのみであった。このうち1枚は完形に復元すること

ができ、23cm×27.7cmを計ることができた。このことから瓦埴は短辺を横に、長辺を縦に立て並べられていたことが判ったが、一段であったのかそれ以上積まれていたのかは不詳である。仮に一段のみであったとしても、15cm位は削平を受けたことになる。

この建物の土台からは柱穴の検出はなかった。溝内からは土師質土器皿、染付皿の細片が数点出土している。

土城—1 (図4上・図版4)

建—1の北縁側線上を東方へ約2.5m延長したところに位置する。この土城には備前焼大甕が埋設されており、径67×75cm、深さ約42cmを計測した。土城の底には大甕の安定のために約10cmの土砂を入れ、その上に大甕を安置していた。

大甕は底部から約30cm立上がったところで崩壊しており、その高さでの胴径は65cmをはかる。この甕には建—1で使用されていたのと同様の瓦埴と青磁の破片が数点落込んでいた。

溝—1

発掘調査区の西端で、ほぼ南北にはしり、幅約140cm、深さ約50～60cmをはかる。

土師質土器皿(21・33)・羽釜(46)、瓦質土器火舎(60・62)、瓦片、備前焼甕(87・88)・播鉢、瀬戸焼灰釉皿(108)・おろし皿、白磁(128)、青磁等多種類の遺物が出土した。

溝—2

第1トレンチで検出した東西にのびる溝で溝—6によって切られている。幅約50cm、深さ約20cmを計る。出土遺物は土師質土器皿(15・17・20)が主なものである。

溝—3 (図5・図版5)

今回検出した溝の中で最大の規模を誇る。幅は7～8mで深さは約75cmである。方向はほぼ東西にはしり、当初、プラン検出したときは外堀になるのではないかと思われた程である。しかし、深さが浅いこと、幅が狭すぎることから外堀とは考えられない。

遺物には、土師質土器皿(2・7～10・13・14・16・26・27・29・30～32・34～36)、備前焼壺(65・68)・播鉢(71・79・82)・甕、丹波焼壺、瀬戸焼天目碗(109・111・112)、染付皿(120)、青磁碗(123)、小柄の筒(129)等、伊丹城時代のものが多量出土した。

溝—4 (図5・図版5)

溝—3と重なって同一方向にはしり、溝—3によって上部を削り取られているため底部のみ検出した。残存部幅は約1.5～2.3mで深さは約1mであった。

出土遺物は数片の土師質土器皿と砥石片1ヶと少ない。

溝—5

溝—3の北岸法下付近で溝—4と平行にはしる細い溝で、底部を確認したにとどまった。

溝—6

当調査地区東端に南北にはしる浅い溝で、第3トレンチにおいてもその西岸肩口を検出した。幅は約4.3mを計るが、東岸部分の攪乱激しく不詳である。深さは約40cmを計る。

出土遺物には備前焼甕・播鉢、土師質土器皿、瓦質土器火舎、瓦などがある。

溝-7

東西方向にはしる幅約50~60cm、深さ約20~30cmの溝で、V字型で深い部分やU字型で浅い部分があるなど不整形である。

備前焼甕、土師質土器、瓦器碗などが出土するが、点数は少ない。

溝-8

溝-10を斜めに切る形で、北西から南東にのびる。幅は50cm弱で、深さは約10cmである。

遺物としては、瓦質土器火舎(64)と土師質土器皿等が少量出土する。

溝-9

一本の溝が二股に分かれる形で東西方向にのびる溝であるが、発掘調査地区の南端部に接するためにその形態を明らかにし得なかった。あるいは二本の溝が切り合っているのではないかとも考えたが、埋土の変化を見出せなかった。

出土遺物には備前焼播鉢(73)をはじめ丹波焼甕、土師質土器等がみられる。

溝-10

溝-7のすぐ南側に平行してはしている溝で、幅は約75cm、深さは約25~35cmを計る。この溝の東側部分に大きなゴミ溜土壌があり、この土壌のあたりから溝-7の方向にカーブする。

出土遺物には備前焼甕、瀬戸焼灰釉皿、土師質土器皿類、瓦質土器播鉢(55~58と同類)などがある。

溝-11

二股に分かれた溝-9の一方の溝に重なって掘り込まれている溝で東西方向にはしる。幅約100cm、深さ約40~50cmをはかり、出土遺物も多い。土師質土器皿(3・19・23~25・28)、瓦質土器羽釜(51)・火舎、備前焼甕等がある。

溝-12

溝-1に接してほぼ平行にはしており、溝-1の東岸肩口を切っている。幅約50cm~90cmをはかり、深さは約30cmである。

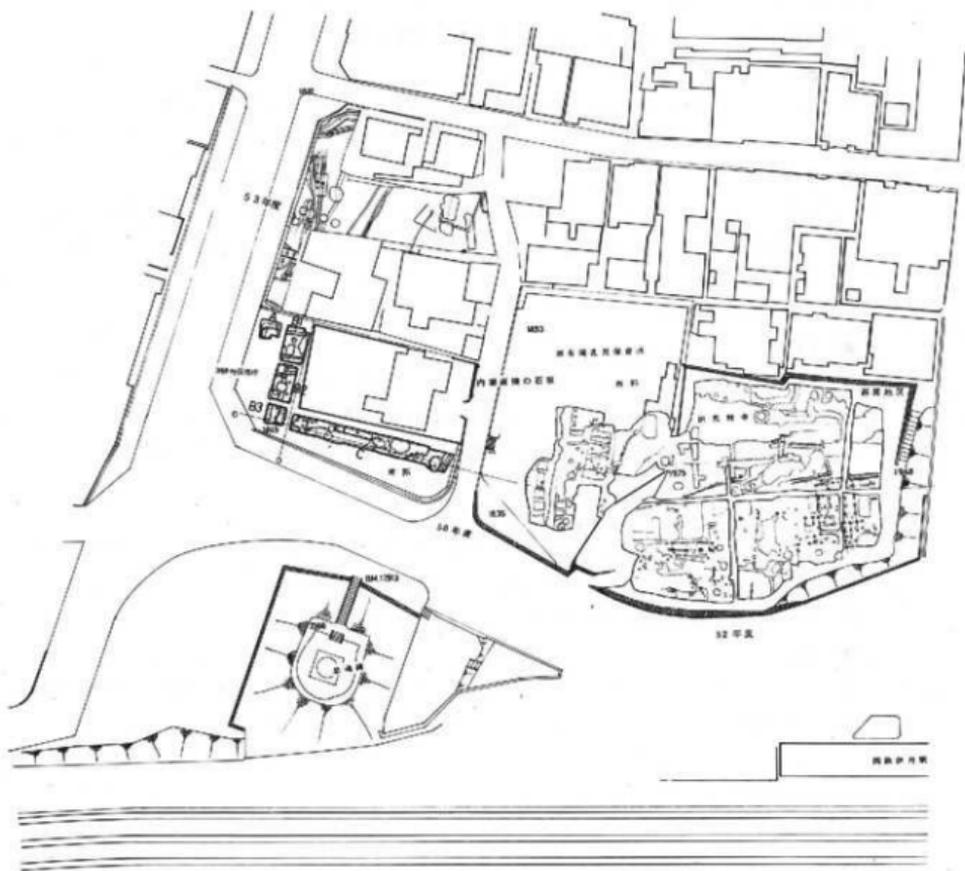
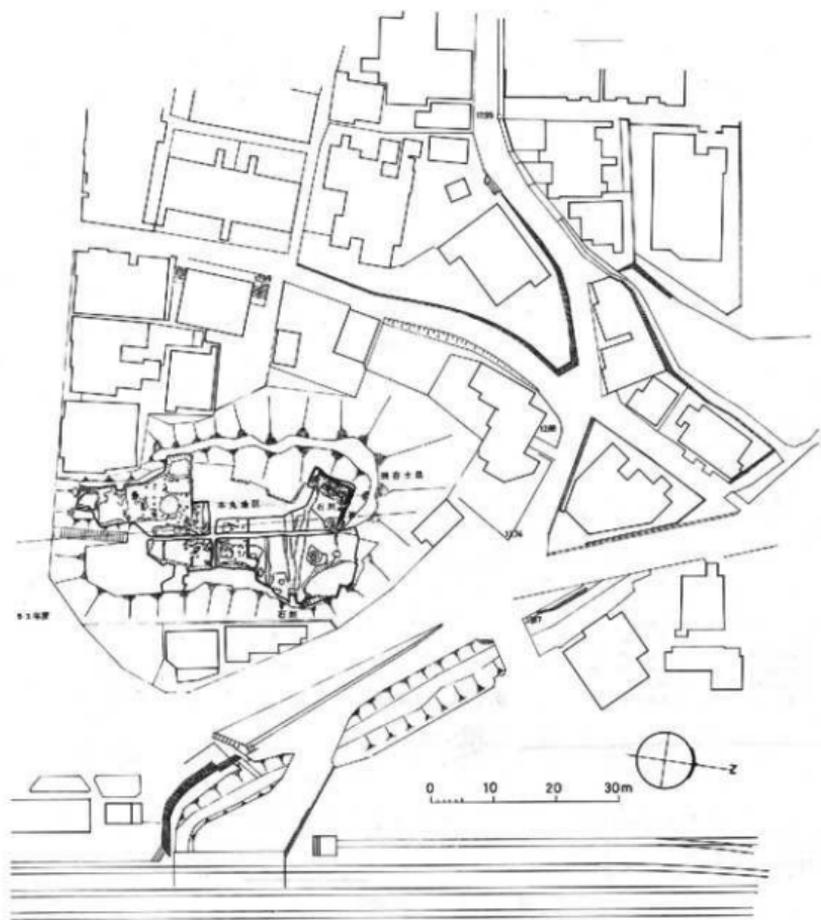
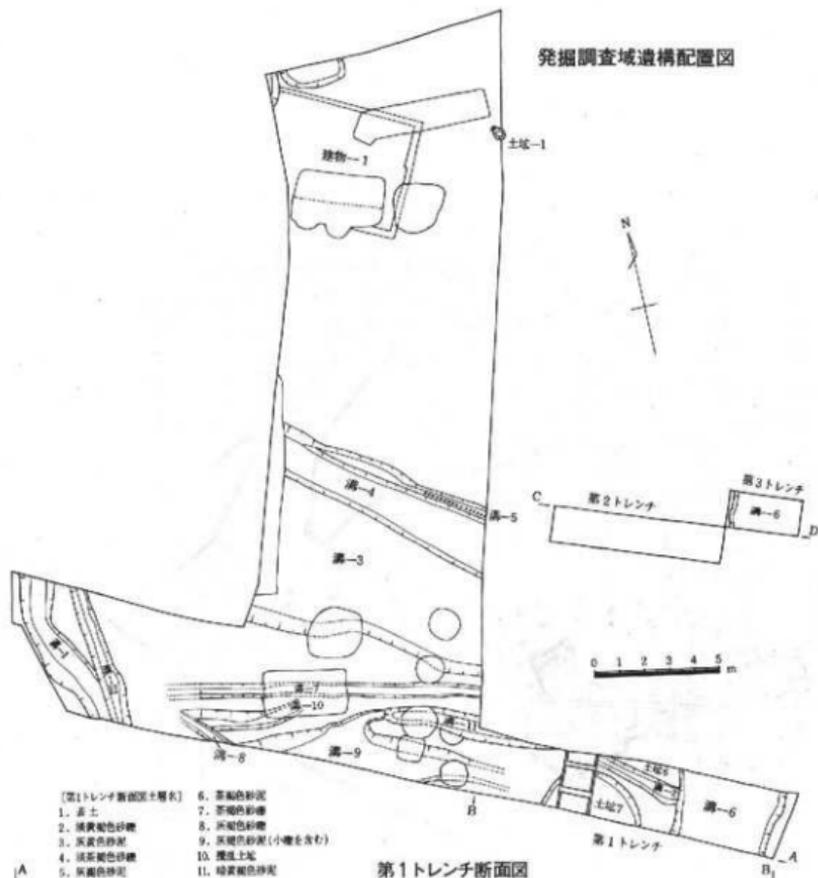


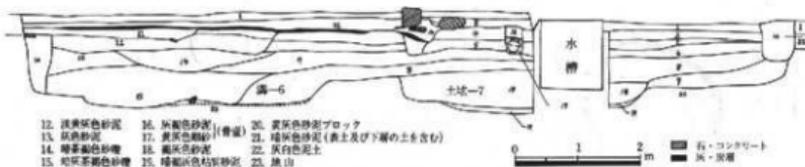
图2 调查地区图



発掘調査域遺構配置図



第1トレンチ断面図



第2・3トレンチ断面図



図3 伊丹城跡第4次発掘調査全域図

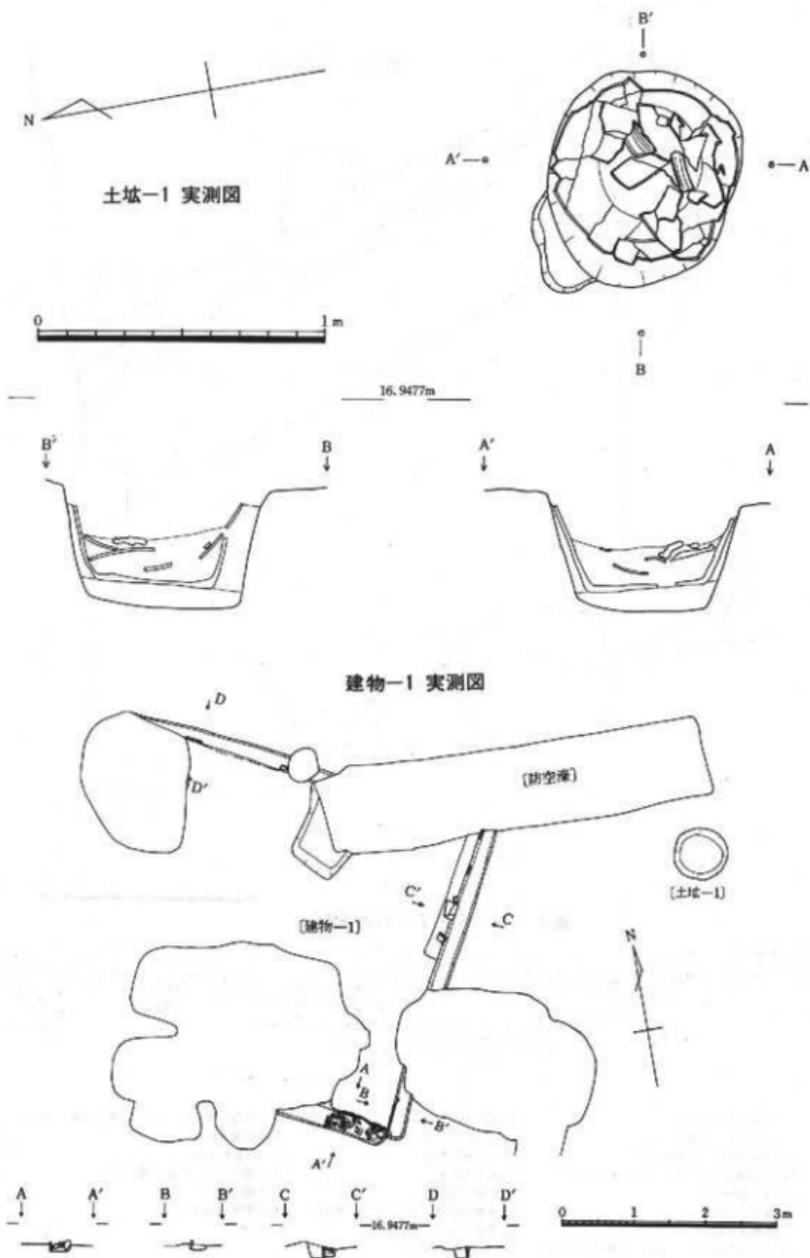
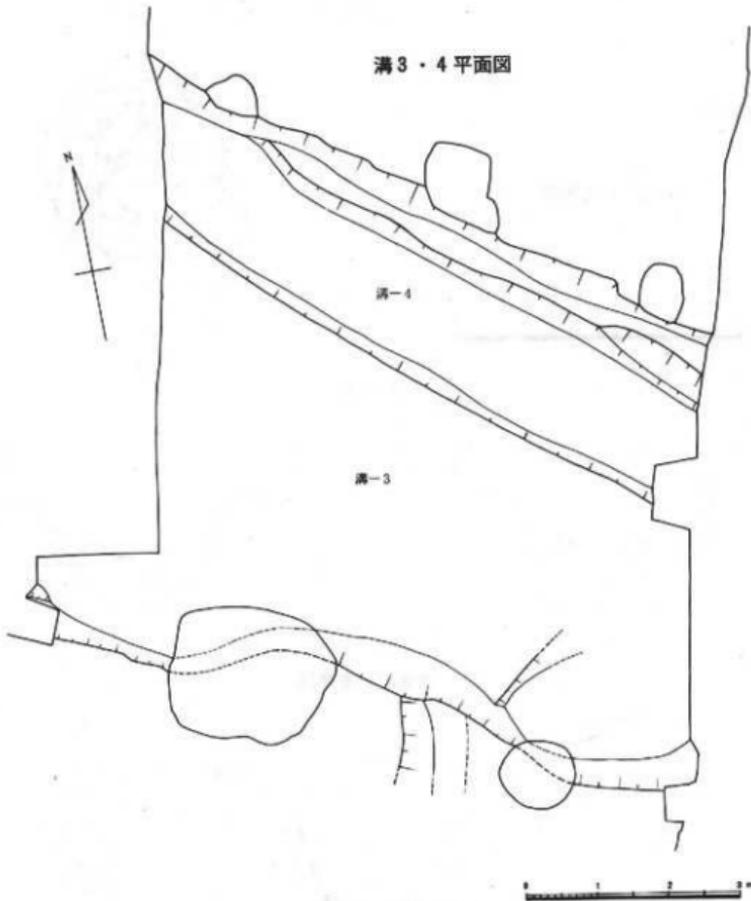
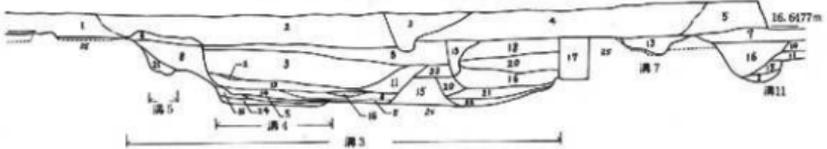


图4 土坡·建物遺構实测图

溝3・4平面図



溝3・4・5・7・11断面図



- | | | |
|-------------------------|---------------------|--------------------------|
| 1 灰褐色砂泥 (表土) | 10 黒灰色泥砂 | 19 灰褐色砂礫 (6より大きな礫を多量に含む) |
| 2 灰褐色砂泥 (礫を含む) | 11 淡褐色砂泥 | 20 黄灰褐色砂泥 |
| 3 灰褐色砂泥 (小礫を含む) | 12 明灰褐色砂泥 | 21 淡灰褐色砂泥 |
| 4 暗灰褐色砂泥 (礫、ブロックを含む) | 13 褐灰色砂泥 | 22 灰褐色砂泥 (粘質を帯びる) |
| 5 暗灰褐色砂泥 | 14 明黒灰色砂泥 | 23 茶褐色砂泥 |
| 6 淡茶灰色砂泥 | 15 灰褐色砂泥 (7より明るく均質) | 24 暗茶褐色砂泥 |
| 7 灰褐色砂泥 | 16 茶灰色砂泥 | 25 地 山 |
| 8 暗灰褐色砂泥 (4・5層より礫少なく均質) | 17 (曲物埋設土底) | |
| 9 灰黄色砂礫 | 18 淡灰色砂礫 | |

図5 溝状遺構実測図

Ⅲ 遺物

第4次調査で出土した遺物は、弥生式土器数点(130)をはじめ須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器類、磁器類、瓦・瓦葺類、銭貨、金属製品等で、時代については弥生式時代から近代までの広範囲にわたっている。本報告書では主に伊丹城時代に関連する土器類を中心に整理を行った。

遺物の中で図示したものについては通し番号(1~130)を、図示できず写真のみの遺物については200番台の番号を付した。

遺物の解説

(1) 土師質土器

羽釜、土鍋、浅鉢状土器、皿類等が出土しているが、皿類が圧倒的出土量を誇る。

a. 皿類 (1~36)

一般的に灯明皿と呼ばれる類で、伊丹城跡発掘調査報告書Ⅲに準じて三つのタイプに分類した。

○小皿 口径7~8cm前後で、手づくね成形ののち、口縁部に軽く横ナデ調整を施す。手づくねの痕跡が体部から口縁部にかけてそのまま残り、凹凸激しく口径のひずみも大きく、器壁も厚い(1~12)。

ヘソ皿(上げ底)と呼ばれるもの(1~6)と、平底のもの(11・12)とに分かれ、1はヘソが大きくていねいにつくられている。また、底内面周縁に強い横ナデを右廻りに1回施すもの(1~3・5・8)があり、2にはその部分に赤褐色の顔料が残っている。

口縁部にススが付着し、灯明皿として利用されたもの(2・4)がみられる。

○中皿 口径10cm前後で、手づくね成形ののち、口縁部の仕上げ調整がていねいで、口径のひずみも小さい(13~27)。

形態も多種多様で、ヘソ皿(上げ底)のもの(13・15・25)、平底のもの(19)、球形を呈するもの(16・18)があり、体部と口縁部との境に段をもつもの(19~21・23・26・27)や、口縁端部に軽くつまみ上げのあるもの(13・14)などがある。また、底内面周縁に小皿でみられた強い横ナデを右廻りに1回めぐらすもの(13)や、圏線をもつもの(19)もある。13には口縁部にススが付着している。

○大皿 口径12cm前後以上で、体部から口縁にかけて仕上げ調整が非常にていねいで、体部の手づくね痕はほとんど認められない。なお、26・27については口径の大きさにとられず、形態の特徴を重視して中皿の方に入れた。

底部は全て平底で、底内面周縁に圏線をもつもの(29~31・36)や、口縁端部につまみ上げのあるもの(29・30)、体部に稜線をめぐらすもの(28・33)がある。35は底内面周縁に強い横ナデを右廻りに1回施し、体部は深い形態である。36は口径が18.3cmあり、特に大きな皿である。29には口縁部に2ヶ所ススが付着する。

b. 羽釜 (37~39)

瓦質のものに混じて、土師質のものが数種類出土している。その主なものを図にかかげた。

38は口頸部が内傾し、短かい立上がりをもつ。銚部も短く、ほぼ水平に張り付けてある。

37・39は口頸部はほぼ垂直に立上がり、鉄釜にみられる段をつけている。体部はいずれもヘラ削りのままである。銚部については、37は水平に取りつけられ、端部は \exists 状(a型)を呈す。39はやゝ上向きにつけられ、端部は \square 状(e型)を呈す。

c. 壺形土器 (40)

口縁部の破片が一片のみ出土。そのため全容は判らないが、口縁部は水平に外反する。外反した口縁上部に蓋受状の凹みを認める。

d. 浅鉢状土器 (41~43)

口縁部はズンぐりした三角形状を呈し、内面から口縁部にかけて横ナデによるていねいな仕上げ調整がなされているが、体部外面はケズリ調整のままらしくザラザラしている。体部の肉厚は口縁部に比べて非常にうすく、口縁部と体部の境界はシャープである。

(2) 瓦質土器

羽釜・播鉢形・甕・火舎・鉢が主な出土品である。他に細片であるが碗も少量出土している。

a. 羽釜 (44~51)

全ての口頸部には、鉄釜にみられる段をもち、口頸部の立上がりについては内傾気味であるが、ほぼ垂直に立上がるもの(44・45・47・50)、直線的に内傾して立上がるもの(46・48・49)、外反して立上がるもの(51)の三通りに分けることができる。また銚部についても水平にのびるもの(45・46・49・51)、上向きに取りつけられているもの(44・47・48・50)の二通りに分かれる。銚部の端部については、 \exists 状(a型)を呈するもの(48)、 \square 状(b型)を呈するもの(50)、 \square 状(c型)を呈するもの(44・45・47・49)、 \square 状(e型)を呈するもの(46)、 \triangleright 状(f型)を呈するもの(51)など多様である。

b. 播鉢形土器 (53~58)

口縁部はズンぐりした丸味をもった三角状を呈し、内面はハケ目でもってていねいに仕上げられている。口縁部の形態には二通りあり、口縁部から体部の境界がくの字状にすんなりとつながるもの(53・54)と、その境界部に垂れ下がった突出部をもつもの(55~58)とに分かれる。また、53~56には内面に条線を認める。

c. 甕 (59)

1点のみ出土し、口縁部の肉厚のわりには体部は肉薄である。外面のタタキは左上がりに施され、内面には乱雑にハケ目が施されている。

d. 火舎 (60~64)

鉢形を呈するもの(60~62)と筒状形(火消壺形)を呈するもの(63・64)とに分けられる。いずれも、外面はヘラみがきされ半光沢をもつ。

鉢形のは、いずれも口縁部付近に二本の突帯をめぐらし、その中に連続してあるいは等間隔にスタンプを施している。61には突帯の下に円形状の透し窓を認める。62のスタンプは花菱（唐花菱）をあしらった文様を連続してめぐらせてある。

筒状形のものにも口縁部付近に二本の突帯をめぐらし、その中に鉢形のものと同様スタンプを施している。

e. 鉢形土器 (52)

鉢形火舎と同様の形態であるが、口縁部付近には突帯をめぐらしていない。外面は火舎と同様ヘラみがきがなされており、半光沢をもつ。

(3). 備前焼

今回の調査においてもいままでの調査同様、他の陶器類を寄せつけない圧倒的な出土量を誇っている。備前焼の中でも特に甕・播鉢の出土量が多い。備前焼の編年は、間壁忠彦・間壁殿子両氏の⁵⁾労作があり、それに従って記述した。

a. 甕類 (65~68)

今回の調査では、甕類の出土は少なく、その主なものを図示した。

66は、口縁部が欠損しているが、玉縁状の口縁をもつと思われる。肩部には3条の帯描直線が二帯めぐり。Ⅲ期後半ごろに比定できるものではないかと考える。

65は、外反する短い直口々縁をもつもので灰色系の色を呈す。Ⅴ期に比定できる。

67は、小形の甕の体部から底部にかけて残存するものである。片口の口縁をもつ甕になるものと思われる。

68は、外反して直線的に立ち上がる甕の底部で、体部の深いものと思われる。

b. 播鉢 (70~83)

Ⅲ期からⅤ期、さらに江戸時代にかけての型式のものが出土している。

70は、上下に拡張するきざしを認めるが、未だ口縁端部は面取りしたような形態を示す。条線も口縁端部から施され、口縁部と体部との境は認められない。Ⅲb期に比定できよう。

71~73は、口縁部が上下に拡張する傾向を明瞭に示し、口縁部断面は三角形を呈す。口縁部と体部との境界が内外面ともに明らかになるのもこの時期の特徴であろう。Ⅳa期である。

74・75は、口縁部の拡張がさらに発達し、口縁端部に面をもつ。Ⅳb期のものである。

76~83は、Ⅴ期の範ちゅうに入るもので、口縁部外面には凹線がめぐりものもある。口縁部と体部との内面の境界はくの字にくびれて、明瞭である。口縁部の形態が多様化の様相をみせるのもこの時期の特徴である。

c. 甕 (84~96)

口縁部は全て玉縁の形態をもつが、時期によって変化する。84・85・92は、いわゆる玉縁と呼ばれる丸い形であるが、玉縁の下端部が下へ拡張して、玉縁がくずれ始めるきざしを

示す。Ⅲb期に比定できよう。

93は、玉縁のくずれがさらに大きくなり、Ⅳ期に比定できる。

86～88は、玉縁状の形態を示すようであるが、そのくずれは大きく断面形はざんぐりした四角形を呈す。Ⅳ期末～Ⅴ期初に比定される。

Ⅴ期になると玉縁はさらに下方へ拡張し、口縁部外面には強弱の凹線をめぐらし、端部は鋭く角張って稜をもつ。播鉢同様、口縁部の形態が多様化の様相をみせるのもこの時期の特徴である(89～91・94・96)。

(4) 丹波焼 (97～105)

壺類(97・98)・甕(99～102)・播鉢(103～105)に大別できる。97の壺は、口縁部が外反する広口壺である。98は徳利形瓶子であり、口縁まで一気にロクロで引き上げている。

甕(99・100)はともに口縁部が水平に外反するもので、口縁部まで成形したのち、一条の粘土ひもをもって口縁を仕上げている。102の甕は、口縁部は内外に水平に拡張し、体部外面には鉄釉をほどこしてある。

播鉢は、全て一本のヘラ播条線をめぐらし、口縁端部は面取りしたような三角形を呈す。

98の徳利形瓶子および102の甕は江戸時代前半頃のものと考えられるが、その他のものは室町時代前半のものである。

(5) 瀬戸焼・須恵質陶器

瀬戸焼には灰釉皿(106～108)、天目碗(109～116)およびおろし皿などが出土しているが、おろし皿は底部片であったため割愛した。天目碗の底部は削り出し高台である(114)。

須恵質陶器(117)は低い張り付け高台をもち、底部付近はヘラ削りを認める。壺の底部と考える。

(6) 青磁(122～127)

碗(122・123)と鉢(124～127)に分けられ、碗には、口縁下に一条の波線を描き、その下に縦線を入れる蓮弁をあしらっている。

鉢には口縁が円形のもの(125)と稜花のもの(124)とがあり、124の口縁部内面には雲気文を施してある。126・127の碗心には印花文を施してある。

(7) 染付(118～121・200)・白磁(128)

今回の調査では、染付・白磁の類の出土量は少なかった。染付は、碗・皿に大別できるが、その大半は古染付(江戸時代初期)で、時間的制約のため今後に課題を残さざるを得なかった。

白磁は1片のみ(128)の出土で、口径が23cmと大きな皿である。

(8) 小柄の鞘(129)

4次にわたる調査ではじめて出土したもので、長さは9.2cmをはかり、幅は1.4cm、厚さは0.7cmである。鞘は鉄でつくられ、その上に薄く化粧銅を施している。化粧銅はあちこち剝離した部分があり、その部分には鉄サビが見える。全体には緑青がふき出ている。鞘中には刃部ら

しきものがのぞいているが、それが刀身の1部分なのか、否かは不詳である。

(9). 銭貨

元符通宝1枚、寛永通宝2枚の計3枚が出土した。元符通宝は外径2.35cmを計り、文字ははっきりと判読できる。あまり質のよいものではなく、数ヶ所に虫喰状の小さな穴があいている。初鑄年代は元符元年(北宋)で、西暦1098年である。



遺物整理には、調査参加者以外に大塚康宏(奈良大学)氏および伊丹市立博物館の協力を得た。また、丹波焼については、兵庫県教育委員会大村敬通氏の助言を得た。記して感謝の意を表したい。

IV まとめ

今回の調査では当初予想もしなかった建物跡や土坑・溝状遺構などを検出したのであるが、これらの遺構が伊丹城とどのような関係にあるのか、その性格や機能について積極的に位置づけることができないのが実情である。なぜなら、建-1の建物跡についてみても同様の建物跡の検出例は中世城郭で数例あるものの未だその性格など全くわかっていないことや、特に溝-3・4・6の溝状遺構の性格が伊丹城の一面を画するものであるかどうか、建物跡とそれらの溝との関係についてはどうなのか関連づけられないからである。

ただ、調査過程で第4次調査地区はもともと伊丹城内には含まれていなかったのではないかということを推察した。それは、第1に当初目的とした外堀は検出できなかったこと、第2にその外堀は第4次調査地区を取り巻く形では存在していないらしいこと(西側の道路をへだてた民家の井戸の観察では地表下に地山を認めた)、第3に第1次調査で検出した東西方向にのびる堀跡(第3次調査までは内堀と考えられていた)が外堀の可能性をもつと判断できる諸点からである。この堀は、第4次調査地区の直ぐ北側をかすめて東方向から北の方へ曲がっていると推定できる⁽⁶⁾。この推定は、第3次調査で検出した土塁の基底部のラインが同様の方向にのびているのと合致する。

ところで、荒木村重は天正2年(1574年)に伊丹城に入城し、有岡城と改名するとともに新しい城づくりに着手したようである。村重が伊丹城へ入城した2年後の天正4年(1576年)にポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは有岡城を訪れ、その時の模様を彼の書簡の中で次のようにしている。

「我等は宵の口に伊丹と称し甚だ壮大にして見事なる城に着きたり。城主《村重》は直に我等を引見し非常なる款待をなし、(中略)彼は又新に築造せる彼の壮麗なる城を日中に觀せんと欲し、翌日は是非彼と午餐を共にせんことを望みしが我等は黎明前出発すること必要なりき。」(傍点は筆者)

村重はフロイスに「新に築造せる」城を見せたかったらしいが、実際にはフロイスはみず伊丹

を出ている。そのため有岡城がどのような城であったかについては「壮大にして」、「壮麗なる」等の贅辞以外には何ら具体的には記述されていないが、かなり立派な城であったことは想像に難くない。

この新たに築造せる城とは何を示すのか不詳であるが、1つには伊丹城の中核部を拡張・整備したこと、他には「惣構え」の城に改造したことの二点が考えられる。いずれにしても、伊丹城は村重の入城によって大きく変貌したのであろう。

この新しい城づくりと今回の調査地区との関係は明確にはできないのであるが、当調査地区は村重によって伊丹城の中核部に付加された施設ではなからうかと考えている。つまり、土壇-1の大甕は備前焼編年V期にあたり、村重入城の時期に比定できるし、建-1の建物跡は同様の建物が他の中世城郭からも検出されている事実から考えて一般民家の建物とは考えられないことなどから、おそらく村重の新しい城づくりの一面に組み込まれたものと思われる。

そう考えた場合、溝-3・4・6はその中核部を区画した溝で、建-1や土壇-1はその中に設けられた施設である公算は大きい。このことはあくまで推測の域を脱するものではない。しかし、これらの遺構は伊丹城の変遷を知るうえで、今後の調査研究にかかせない資料になるであろうことは否定できない。

今般、有岡城が国指定史跡になるにあたって、その整備計画の中で計画的・系統的な発掘調査・研究を行い、惣構えの形態・機構等の全容が明らかになれば、その位置づけはおのずと明確になるであろうと考える。

注

- (1) 鈴木 充「伊丹城」『地域研究いたみ』第4号 伊丹市 1975.9
- (2) 『伊丹城跡発掘調査報告書』I・II・III 伊丹市教育委員会 1976~1978
- (3) 姫路市教育委員会社教文化課技師 秋枝 芳・山本博利両氏の教示を得た。御着城跡の場合、建物の外側の計測値は短辺で約480cm、長辺で600cm強である。
- (4) 岡本一士「羽釜形蔵骨器の形式」『日本仏教民俗基礎資料集成一 元興寺極楽坊I 蔵骨器』(中央公論美術出版1976)の48頁に図化されている鋳断面型式に従った。
- (5) 間壁忠彦・間壁殿子「備前焼研究ノート」1・2・3『倉敷考古館研究集報』第1号・第2号・第5号
- (6) 脱稿後、伊丹市立博物館所蔵の「天保7年内中秋写 川辺郡伊丹略図」を見ることができた。その絵図によると、今回我々が想定した外堀の位置とは、同じ場所に外堀が描かれている。
- (7) 八木哲清編「荒木村重史料」『伊丹資料叢書』4 (伊丹市 1978.3)の65頁“94 天正6年8月ルイス・フロイス書翰の一部”による。
- (8) 伊丹城をさす場合、城郭そのものをさすのか、惣構えも含めているのか明確ではない。この概念規定をすべきであるが、それは今後の機会にまわして、今は城郭そのものを示す言葉として「中核部」という表現をとった。

伊丹城惣構えについて (図1・図版1参照)

城郭の縄張りには大きく分けて3つの形態があることが指摘されている。1つは急峻な山谷を利用した山城、2つには平野など平坦な地形に築いた平城、3つ目は基本的には平野や平坦面に立地しながら、その平坦な場にある独立丘などの小高い丘に築いた平山城の3形態である。

城主の居館と城塞が一体化した平城の形態は、商業活動や交通等の領地経営には有利な面をもつが、いざ戦闘という場合には防禦の面で不利である。この不利な面を補うために城郭の外側を広く取り巻く防禦帯を設け、その周囲に堀と土塁をめぐらし城郭を強固なものにしている。これが「惣構え」と呼ばれるもので、近世の城郭には城下町の一形態として多くとり入れられている。

伊丹城は、伊丹台地の東縁部の一部を利用し、東側には猪名川をひかえ、それが形成している低湿地および伊丹台地の絶壁という自然条件を巧みに活かした城郭で、山谷を利用した山城とは異なる平城の形態をとっている。このように伊丹城の東側は自然条件による完璧なまでの防禦帯を備えているが、西と南の二方には台地の平机面が広がっており防禦面では不利である。そのため、伊丹台地上の段差を利用して、伊丹城の周囲に東西約600m、南北約1,500mの中太りの細長い形で防禦帯を設け、その中に迷路のように張りめぐらした道路網と町家を配置し、その周囲に堀と土塁をめぐらせて伊丹城を強固なものにしている。

また、伊丹城には惣構えの要衝要衝に「北の砦」・「ひよどり塚砦」・「毘陽口砦」・「女郎塚砦」の4砦が設けられていたらしいが、いまその砦跡に比定できるのは「北の砦」跡と「ひよどり塚砦」跡のみで、あとの2砦の所在はわかっていない。「北の砦」跡は猪名野神社となっているが、そこには神社境内を取り巻くように土塁と堀跡と思われる水路がよく残っている。もし、第1の防禦線である堀と土塁が破られても、迷路のように張りめぐらされた道路網と町家を配置した防禦帯＝惣構えが有効に城内を守ってくれるのである。信長が、反旗をひるがえした村重を有岡城に鉄砲と火矢をもって攻めたにもかかわらず、その守りは固く落城に10ヶ月も費やしていることはこのことを証明しているよう。

伊丹城は、鈴木 充の研究で惣構えの形態をもつ中世城郭であることが判明したが、それがいつの時代に構築されたかは不詳である。おそらく、鎌倉時代末から南北朝頃に伊丹氏がこの地に居館を構えたのち、戦国時代の群雄割拠の荒波を経る中で城塞化し、最終的に惣構えの形態をもつに至ったものと考えられる。

そして、伊丹城廃城後、この惣構え内の町並みは、江戸時代を通じて酒づくりを中心とする産業と商業の町として発展し、さらにその後の町づくりの土台となった。

伊丹城跡第4次調査出土遺物観察表

土師質土器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
小 皿	1	○体部は直線的に立ち上がる。 ○上げ底（丁寧に仕上げている）。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕と部分的に布目を残す。 ○底内面周縁に一周横ナデ調整（右廻り）。	第1トレンチ 土壌7 ○口径：7.4cm
	2	○ほぼ直線的に立ち上がる体部。 ○上げ底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。	E-4 溝3 暗灰褐色砂泥 ○口径：7.7cm ○口縁部の一部に煤が付着する。
	3	○体部から口縁部へは外反気味に変換する。 ○口縁部はほぼ直線的にのびる。 ○わずかに上げ底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○底内面周縁に強い横ナデ調整（右廻り）。 ○体部外面に指頭圧痕。	E-2 溝11 ○口径：6.8cm
	4	○体部は直線的に立ち上がる。 ○上げ底。	○内面から口縁部にかけて横ナデ調整。 ○体部に指頭圧痕。	E-3 ゴミだめ46 ○口径：7.4cm ○口縁部及び底部内面に煤付着。
	5	○体部は外弯して立ち上がる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。 ○底内面周縁に強い横ナデ調整（右廻り）。 ○底内面周縁の凹みには赤褐色の顔料が残る。	D-2 褐灰色シルト ○口径：8.0cm
	6	○体部はやや外反気味に立ち上がる。 ○上げ底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部に指頭圧痕。	第1トレンチ 土壌7 ○復元口径：8.0cm
	7	○口縁部、体部ともに直線的に立ち上がる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕をかすかに残す。	E-4 溝3 明灰褐色砂泥 ○復元口径：8.0cm
	8	○体部はほぼ直線的に立ち	○内面から口縁部外面	D-5 溝3 黄褐色溝内ブ

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
小皿		がる。 ○わずかに上げ底。	は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。 ○底内面周縁に強い横ナデ調整（右廻り）。	ロック ○復元口径：8.1cm
	9	○体部から口縁にかけて直線的に立ち上り、厚い。 ○口縁端部が外反気味に拡張する部分がある。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。 ○口縁部外面にハケ状工具とヘラ(?)先の痕跡をとどめる。 ○内面にも不整方向のヘラ状工具の痕跡を残す。	D-4 セクション内溝3 ○復元口径：8.4cm
	10	○体部はほぼ直線的に立ち上り、口縁部は厚く発達する。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面にわずかに指頭圧痕を残す。 ○全体的に成形した後に肉厚をつけるために粘土をたしている。	D-5 溝3 黄褐色溝内ブロック ○復元口径：7.6cm
	11	○やや内弯気味に立ち上がる体部。 ○平底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。 ○底内面にナデをほどこす。	D-4 セクション ○口径：7.8cm
	12	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○平底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○口縁部外面を横ナデ調整した後に口縁部から底部にかけてナデを部分的に施す。	F-8 灰黄色砂泥 ○復元口径：8.2cm
中皿	13	○体部は直線的に立ち上がり、口縁端部につまみ上げを認める。 ○底は、上げ底の痕跡あり。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面は指頭圧痕をわずかにとどめる。 ○底内面周縁に強い横ナデ調整（右廻り）。	E-3 溝3 灰黄色砂礫 ○口径：8.9cm ○口縁端部に煤付着。
	14	○体部はほぼ直線的にのび口縁端部につまみ上げを認める。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。	D-5 溝3 明灰色砂礫 ○復元口径：10.8cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
中皿	15	○体部は直線的のびる。 ○上げ底。	○体部内面から口縁外面は横ナデ調整。 ○体部外面及び底部外面は指頭圧痕を残し、その上にナデの痕跡あり。	第1トレンチ 溝2 ○復元口径：9.8cm
	16	○体部は直線的のび、口縁部でやや内側に角度を変えて立ち上がる。 ○つまみ上げの痕跡あり。	○口縁部周辺は横ナデ調整。 ○体部に指頭圧痕。	D-5 溝3 上面明灰色砂礫 ○復元口径：10.7cm ○口縁部に煤が付着している。
	17	○体部外面はほぼ直線的に口縁部へのび、口縁部は丸くおさめる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面には指頭圧痕が残り、その上にナデの痕跡あり。	第1トレンチ 溝2 ○復元口径：11.6cm
	18	○体部は内弯しながら立ち上がる。	○体部内面はタテ方向のナデが加えられ、口縁部はその後に横ナデ調整。 ○体部外面下半に指頭圧痕あり。	第1トレンチ 土壌4 第1層 ○復元口径：9.8cm ○口縁部の一部に煤の付着が認められる。
	19	○体部から口縁部へは低く外反気味に立ち上る。 ○平底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部に指頭圧痕。 ○底内面周縁に圏線がめぐる。	E-2 溝11 ○口径：10.6cm
	20	○体部外面と口縁部外面との境界は比較的明瞭で、体部から口縁部へは外弯しながら変換する。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。	第1トレンチ 溝2 ○復元口径：10.8cm
	21	○体部外面と口縁部外面との境界は比較的明瞭で、体部から口縁部へは外弯しながら変換し、口縁部もやや外反気味に立ち上がる。	○内面から口縁部にかけては横ナデ調整。 ○口縁部及び体部には指頭圧痕が残り、さらにその上に軽いナデが加えられている。	B-2 溝1 ○復元口径：10.0cm
	22	○体部外面は外反気味に立ち上がる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。	B-2 溝1 ○復元口径：9.6cm

器 形	土器 番号	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
中 皿	23	○体部外面は外弯しながら口縁部へつながる。 ○口縁部外面はわずかに内弯気味に立ちあがり、口縁部中程に軽く凹線がはいる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部には指頭圧痕。	第1トレンチ溝11 ○復元口径：9.6cm
	24	○体部は外弯しながら立ち上がる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。	E-2 溝11 ○復元口径：10.3cm
	25	○体部外面はほぼ直線的に立ち上がる。 ○上げ底。	○全体的に横ナデ調整。 ○体部にかすかに指頭圧痕。 ○底部外面は2本の指を同時に押しつけてヘソをつくり出す。	E-2 溝11 ○口径：10.6cm
	26	○体部外面は外弯気味に口縁部へのび、口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○口縁部外面及び体部外面に指頭圧痕。 ○口縁部外面には指頭圧痕の上に粗いナデの痕跡が認められる。	E-4 溝3 上面灰黄色砂礫 ○復元口径：11.6cm
	27	○体部は外弯気味に口縁部にのび、口縁部は直線的に立ち上がる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部に指頭圧痕。	D-3 溝3 上面灰黄色砂礫 ○復元口径：12.0cm
大 皿	28	○ほぼ直線的に立ち上がる体部。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○口縁部外面から体部外面に指頭圧痕。 ○底部内面周縁に圏線。	E-2 溝11 ○復元口径：12.6cm
	29	○体部はほぼ直線的に立ち上がる。 ○口縁部はわずかにつまみ上げを認める。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面にはわずかに指頭圧痕を残すが丁寧に仕上げられている。 ○底内面周縁に圏線。	D-5 溝3 上面黄灰色砂礫 ○復元口径：12.7cm ○口縁部に煤が付着する。
	30	○体部外面は直線的に口縁部にのび、口縁部はわずかに外反する。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面には指頭圧痕。	E-3 溝3 灰黄色砂礫 ○復元口径：14.5cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
大 皿		○口縁端部はわずかにつまみ上げを認める。	痕が残り、さらにその上に粗いナデの痕跡あり。 ○底部内面周縁に圈線。	
	31	○体部外面は内湾気味にのび、口縁部は外反する。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面に指頭圧痕。 ○底部内面周縁に圈線。	D-4 溝3 灰褐色砂泥 ○復元口径：12.8cm
	32	○体部外面はほぼ直線的に低く立ち上がる。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部・底部外面には指頭圧痕が残り、その上に軽いナデ。	E-3 溝3 灰黄色砂礫 ○復元口径：13.8cm
	33	○体部は全体的に低く外反して立ち上がり、体部と口縁部の境界には鈍い接線がめぐる。	○内面から口縁部は横ナデ調整。	B-2 溝1 ○復元口径：14.8cm
	34	○体部は低く直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 ○粘土の折り返しの接合部を認める。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面はナデ調整。 ○体部外面にヘラ先(?)の痕跡がある。	E-4 溝3 暗灰褐色砂泥 ○復元口径：13.4cm
	35	○体部は直線的に立ちあがり口縁端部で外反する。	○内面から口縁端部は横ナデ調整。 ○底内面周縁に強い横ナデ調整1回(右廻り)。 ○体部外面には指頭圧痕が顕著に残る。	E-3 溝3 灰黄色砂礫 ○復元口径：13.8cm
	36	○体部は直線的に立ち上がる。 ○平底。	○内面から口縁部外面は横ナデ調整。 ○体部外面から底部外面には軽い指頭圧痕や布目痕が残る。 ○底内面周縁には圈線。 ○底内面はナデ調整。	D-4 溝3 上面明灰色砂礫 ○口径：18.3cm
羽 釜	37	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は面をもつ。 ○鈔はほぼ水平にのび端部は角張っている。	○内面から鈔部にかけては横ナデ調整。 ○体部内面に粗い刷毛目。	表採 ○復元口径：19.6cm

器 形	土器 番号	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
羽 釜			○体部は右廻りのヘラ削り。	
	38	○口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は面を持つ。 ○鈔はやや上方にのび端部は角張る。 ○鈔は貼り付け。 ○体部は内傾気味に立ち上がる。	○口縁部から鈔部は横ナデ調整。 ○体部内面に細かい刷毛目を施している。	第2トレンチ 表土 ○復元口径：17.0cm ○鈔下半から体部にかけて煤が付着する。
	39	○口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。 ○鈔部はやや上方にのび、端部は角張っている。	○体部内面から鈔部は横ナデ調整。 ○体部外面はヘラ削り。 ○体部内面にはうすく刷毛目が部分的に残る。	表採 ○復元口径：33.0cm ○鈔部端部から体部には厚く煤が付着する。
鍋	40	○体部は外反して口縁部に至る。 ○口縁部は水平に発達し、上面に凹みをもつ。	○表面の風化が著しく、手法、調整不詳。	D-6~E-6 灰褐色砂泥 ○復元口径：29.2cm
浅 鉢	41	○口縁部はやや内傾して直立する。 ○口縁端部は丸味をもつ。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○体部は未調整。	表土 ○復元口径：27.0cm ○体部外面に二次焼成かと思われる炭素の吸着が認められる。 (内面にも一部認められる)
	42	○口縁部は内傾して立ち上がり、端部も内傾気味である。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○体部は未調整。	表土 ○復元口径：25cm ○体部外面に二次焼成によるとと思われる炭素の吸着が認められる。
	43	○口縁部はやや内傾して直立する。 ○口縁端部は丸味をもつ。 ○口縁部と体部との変換点はシャープである。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○体部内面は横ナデの後にナデを加える。 ○体部外面は未調整できめが粗い。	第1トレンチ 土城7 褐灰色砂泥 ○口径：29.0cm

瓦質土器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
羽釜	44	○口縁は内湾しながら立ち上がる。 ○鈔は貼り付けで、短くやや上方へのびる。	○横ナデ調整。 ○鈔より下面は刷毛目調整。	D-2 褐灰色シルト ○復元口径：13.6cm
	45	○口縁部は内傾気味に立ち上がる。 ○鈔部はほぼ水平方向にのび、端部は丸くおさめている。	○横ナデ調整。 ○内面は刷毛目。	D-2 茶褐色シルト ○復元口径：20cm ○鈔部下半に煤が付着する。
	46	○口縁部は内傾気味に立ち上がる。 ○鈔部は水平方向にのび、端部は上方にはりだし気味に角張る。	○横ナデ調整。 ○鈔部下半から体部には右廻りのヘラ削り。 ○内面には刷毛目を施した後に軽く横ナデを行なった痕跡が残る。(刷毛目の方向は右廻り)	B-2 溝1 ○復元口径：20.2cm
	47	○口縁端部は内傾気味に立ち上がり、端部はつまみ出され、端部は面をなす。 ○鈔部はわずかに上方にのび、端部は丸くおさめている。	○横ナデ調整。 ○内面は刷毛目。 ○体部外面は右廻りのヘラ削り。 ○鈔部は貼り付け。	第3トレンチ 表土 ○復元口径：19.2cm
	48	○口縁部は内傾して立ち上がり、端部はつまみ出され、面をなす。 ○鈔部はわずかに上方にのび、端部は角張る。	○横ナデ調整。 ○内面は刷毛目。 ○鈔部は貼り付け。	D-2 茶褐色シルト ○復元口径：20.8cm
	49	○口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は面をなす。 ○鈔部は水平にのび、端部は丸味をもつ。	○横ナデ調整。 ○内面には粗く強い刷毛目の上に細かい刷毛目を施す。 ○鈔部と体部の境界には強いナデが施されている。 ○体部は右廻りのヘラ削り。	D-2 茶褐色シルト ○復元口径：24.0cm
	50	○口縁部は内傾気味に立ち上がる。口縁端部は中間	○横ナデ調整。 ○体部内面に粗い刷	E-6 pit 81 ○復元口径：27.8cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
羽釜		みの面をなす。 ○鋳部上半はほぼ水平面をなし、下半は上方にのび、端部断面は丸味を持った三角形をなす。	毛目。 ○体部はへら削り。 ○鋳部は貼り付け。	
	51	○口縁部は外傾して立ち上がり、端部は内傾気味に上方に弛張する。 ○鋳部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめている。	○内面から鋳部は横ナデ調整。 ○鋳部は貼り付け。	E-2 溝11 ○復元口径：22.6cm
鉢	52	○体部は内凹して立ち上がる。 ○口縁端部は水平な面をもつ。	○内面は横ナデ調整。 ○口縁端部から体部はへらみがきされ、半光沢をもつ。	C-2 褐灰色砂泥。 ○復元口径：18.8cm
播鉢	53	○口縁部は三角形状を呈す。 ○口縁端部の大部分は丸くおさめている。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○口縁部内面には斜めの刷毛目。 ○内面には条線がはいる。 ○口縁部外面と体部の境界付近は面取り風に横方向に削る。 ○体部外面は下から上へのへら削りの後に右廻りのナデを加える。	D-2 褐灰色シルト ○復元口径：32.4cm
	54	○口縁部は、三角形状を呈し、端部は丸くおさめる。	○内面から口縁部は横ナデ調整。 ○口縁部内面に横方向と斜め方向の刷毛目を施す。 ○内面には22条のクシ目による条線が残る。 ○体部はへら削り。	C-2 褐灰色砂泥 ○復元口径：31.0cm
	55	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、三角形状を呈す。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○内面より口縁部外面まで横ナデ調整。外面はへら削りを右廻りに施す。 ○10条のクシ目条線。	○試掘第1トレンチ東端 暗黄褐色砂泥(地山直上) ○復元口径：28.8cm
	56	○口縁部はほぼ垂直に立ち	○内面から体部上半は	○試掘第1トレンチ

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
描鉢		上がり、端部は丸くおさめ、三角形を呈す。 ○口縁部は若干垂れ下り気味。	横ナデ調整。 ○クシ目条線を施す。 ○体部はヘラ削りの後粗い刷毛目を施す。	暗黄褐色砂泥(地山直上) ○復元口径：32.0cm
	57	○口縁部は内傾して立ち上がる。 ○口縁端部は面をもつ。	○横ナデ調整。 ○体部はヘラ削り。	B-2 褐灰色砂泥 ○復元口径：33.6cm
	58	○口縁部外面は垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめ、三角形を呈す。	○口縁部と体部との境界はヘラ削りにより口縁部は垂れ下がっているように見える。 ○口縁部は横ナデ調整。 ○口縁部をあつくするため粘土を継ぎたしている。 ○内面は刷毛目。 ○体部はヘラ削り。	C-2 褐灰色砂泥 ○復元口径：31.8cm
甕	59	○口縁部は短く外反して立ち上がる。 ○口縁端部をまるくおさめている。 ○口縁部は肉厚。	○口縁部周辺横ナデ調整。 ○体部外面には粗いタタキ目が施されている。 ○内面は不整方向に粗い刷毛目。 ○指圧痕が残る。	第1トレンチ 灰黄色砂礫 ○復元口径：30.6cm
火舎	60	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は広い面をもつ。	○横ナデ調整か？。 ○口縁端部の水平面はヘラで面取り。 ○二条の貼り付け凸帯がめぐる。 ○二条の凸帯の間に唐草文様の刻印(スタンプ)がめぐる。	B-1 溝1 ○復元口径：39.0cm
	61	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○口縁部は水平な面をもつ。	○表面の剝離が著しく調整不詳。 ○外面に二条の貼り付け凸帯がめぐる。 ○だ円形の透しが体部にある。 ○内面に指圧痕らしい凹みがある。	C-2 褐灰色砂泥 ○復元口径：32.7cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
火舎	62	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○口縁部は広い水平な面をもつ。	○内面は横ナア調整。 ○外面は丁寧に磨かれている。 ○外面に二条の貼り付け凸帯がめぐる。 ○凸帯の間に花菱を形どった刻印をめぐらせる。	B-2 溝1 ○復元口径：37.2cm
	63	○ほぼ垂直に立ちあがる体部。 ○口縁部は水平な面をもつ。	○内面から口縁端部は横ナア調整。 ○口縁端部及び体部外面に二条の貼り付け凸帯がめぐる。	D-2 茶褐色シルト
	64	○垂直に立ちあがる体部。 ○口縁部は面をなす。	○横ナア調整（内部には指圧痕らしい凹みあり）。 ○外面に二条の貼り付け凸帯がある。 ○凸帯の間に唐草文様の刻印が残る。	C-2 溝8 ○復元口径：28.5cm

備前焼

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	65	○口縁部は外反して立ち上がる。 ○口縁端部は外傾する面を持つ。	○全体に横ナア調整。	E-4 溝3 暗灰褐色砂泥 ○V期 ○胎土：砂粒を若干含む。 ○焼成：良好。 ○色調：暗灰色。
	66	○口頸部はやや外反気味に立ち上がる。	○横ナア調整。 ○体部外面にクシ描直線文が2単位残っている。 ○体部内面は横あるいは斜方向の強いナアが認められる。	表土 ○Ⅲb期？ ○胎土：1～3mm大の砂粒を若干含む。 ○焼成：良好。 ○色調：茶褐色。
	67	○体部は内弯気味に立ち上がる。	○底部は糸切り底。	第1トレンチ 土壌4 第1層 ○胎土：きめ細かく良好。

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺				○焼成：堅く良好。 ○色調：淡赤褐色。
	68	○体部は外反して立ち上がる。	○体部外面下部に刷毛調整。 ○体部内面は横ナデ調整。 ○底部内面ナデ。	E-4 溝3 明灰褐色砂泥。 ○胎土：1mm以下の砂粒（まれに3mm大）を含み、黒い粒子が散在。 ○焼成：良好。 ○色調：赤褐色。
器形不明	69	○体部は外反気味に立ち上がる。 ○口縁部はやや中凹みの面をもつ。	○横ナデ調整。 ○内外面に成形の際の凹みが何重にも廻る。	表採。 ○胎土：砂粒子は細かいが少し粗い感じ。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：赤褐色。
播鉢	70	○口縁部は三角形状を呈す。	○横ナデ調整。	D-2 褐灰色シルト ○Ⅲ期 ○胎土：雲母等の砂多く、少しきめが粗いが良好。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：赤茶黄色。 ○復元口径：32.4cm ○使用痕あり。
	71	○口縁部は三角形状を呈すが、上方に拡張する傾向をもつ。 ○口縁部下端はわずかに垂れ下りを認める。	○横ナデ調整。	D-4 溝3 灰褐色砂泥 ○Ⅳa期 ○胎土：長石を含み、断面に0.5～2mm大の小礫を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：30.4cm
	72	○口縁部は三角形状を呈すが、上方に拡張する傾向をもつ。	○横ナデ調整。 ○8条単位の条線を施す。	第1トレンナ 褐灰色砂礫 ○Ⅳa期 ○胎土：砂多く、少し粗い。 ○焼成：良好。 ○色調：灰色。 ○復元口径：23.2cm ○使用痕を認める。

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
播鉢	73	○口縁部は三角形を呈すが、上方に拡張の傾向をもつ。	○横ナデ調整。 ○内面に10条単位の条線を施す。	D-2 溝9 ○Ⅳa期 ○胎土：砂多いが細かい方。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：暗赤褐色。
	74	○口縁部は上下に拡張し、口縁端部は面をもつ。	○内外面とも横ナデ調整（体部外面はかるく横ナデ）。 ○内面には6条単位の条線を施す。 ○使用痕著しい。	D-8 土壌9 ○Ⅳb期 ○胎土：砂多く少し粗い。しま状を呈す。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：赤黄褐色。 ○復元内径：31.7cm ○高：11.3cm
	75	○口縁部は上下に拡張し、口縁端部は面をもつ。	○内外面とも横ナデ調整。	D-8 土壌9 ○Ⅳb期 ○胎土：砂多く、きめは少し粗いが良好。 ○焼成：良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：31.7cm ○使用痕著しい。
	76	○体部は外反して口縁部に至る。 ○口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 ○口縁部上端は丸くおさめ内傾する。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に1条の凹線がめぐる。 ○内面の条線は11条単位。 ○底部外縁にナデによる粘土のはみ出しが認められる。	試掘第1トレンチ表土及び埋め土 ○Ⅴ期 ○胎土：精良（黒色粒子を含む）。 ○焼成：良好。 ○色調：暗褐色（口縁部）。 淡黄褐色（体部）。 ○復元口径：34.0cm ○高：13.2cm
	77	○口縁部はほぼ垂直に立ち上る。 ○口縁部上端はやや内傾している。 ○口縁下端に垂れ下がりあり。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に2条の凹線状の凹みがある。 ○内面の条線は7条単位で施す。	D-2 茶褐色シルト。 ○Ⅴ期 ○胎土：きめ細かく良好（コールタール状の黒いふき出しの斑点がある）。 ○焼成：良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○口径：27.7cm ○高：12.1cm

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
播鉢				○使用痕著しい。
	78	○口縁部は心もち内傾気味に直立する。 ○口縁部上端は尖り気味で稜をなす。	○横ナデ調整。	第1トレンチ 暗灰褐色砂質シルト。 ○V期 ○胎土：0.5mm前後の砂粒を含む。 ○焼成：良好。 ○色調：淡灰褐色（口縁部）。 淡茶褐色（体部）。 ○復元口径：30.0cm。
	79	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 ○口縁部上端は尖り気味。 ○口縁部下端の垂れ下り退化傾向。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に2条の浅い凹線状の凹みを認める。	E-4 溝3 上面灰黄色砂泥 ○V期 ○胎土：精良。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：暗茶褐色。 ○復元口径：28.8cm
	80	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 ○口縁部上端は丸くおさめる。 ○口縁部下端は外側に張り出す。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に2条の凹線状の凹みがある。 ○内面の条線は8条単位。	D-3 ゴミ溜め土壌6 ○V期 ○胎土：精良。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：暗褐色（口縁部）。 赤褐色（体部）。 ○復元口径：29.6cm
	81	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 ○口縁上端部を丸くおさめる。 ○口縁下端部はやや外に張り出す。	○横ナデ調整。 ○口縁部断面に粘土の接合痕を認める。 ○口縁部外面に2条の凹線をめぐらす。	表土 ○V期 ○胎土：精良。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：黒褐色。 ○復元口径：33.0cm
	82	○口縁部はわずかに内傾気味に立ち上がる。 ○口縁部上端は内傾する面をなす。	○横ナデ調整。	D-5-E-5 溝3 ○V期 ○胎土：精良。 ○焼成：良好。 ○色調：暗茶褐色。
83	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 ○口縁部上端は内傾する。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に2条の凹線をめぐらす。 ○内面の条線は5条以	第1トレンチ 土壌4 ○V期 ○胎土：砂粒子細かいが、小さな気泡が多	

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
			上の単位。	い。 ○焼成：やわらかく、生焼けの感じ。 ○色調：灰黄褐色。 ○使用痕著しい。
甕	84	○玉縁の口縁。 ○口縁部は外反して立ち上がる。	○横ナデ調整。 ○体部外面と口縁部の境界付近に指頭圧痕が残る。	表採 ○Ⅲb期 ○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：淡茶褐色。
	85	○玉縁の口縁。 ○口縁部は外反して立ち上がる。	○横ナデ調整。	試掘第1トレンチ暗黄褐色砂泥（地山直上） ○Ⅳ期 ○胎土：砂（細かい雲母砂を含む）多く、きめ粗い。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：黄茶褐色。
	86	○玉縁口縁が下方に拡張する。	○横ナデ調整。	B-2 土壌2 ○Ⅳb期 ○胎土：長石、石英粒を含むが緻密。 ○焼成：堅緻。 ○色調：黒褐色。
	87	○玉縁口縁が下方に拡張する。	○横ナデ調整。	B-2 溝1 ○Ⅳb期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：暗褐灰色。
	88	○玉縁口縁が下方に拡張し扁平になる。 ○口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。	○横ナデ調整。	B-2 溝1 ○Ⅳb期 ○胎土：長石、石英粒等が多いが良好。しま状を呈す。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：暗褐灰色。
	89	○口縁部の折り返しが発達し、稜線をもつ。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に軽い3条の凹線がめぐる。	表土 ○Ⅴ期 ○胎土：砂粒を多く含む。

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕				○焼成：良好。 ○色調：淡茶褐色。
	90	○口縁部の折り返しが発達する。 ○口縁部外面に凹線状の凹みがある。 ○口縁部は外反気味に立ち上がる。	○横ナデ調整。 ○体部内面はヘラ削りの後ナデ仕上げ。	B-3 表土 ○V期 ○胎土：砂多く少し粗いが良好。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：暗赤褐色。
	91	○口縁部の折り返しが発達する。 ○口縁の外面に凹線様の凹みが生じる。	○横ナデ調整。	第1トレンチ 土壌4 ○V期 ○胎土：きめ細かく良好。 ○焼成：堅緻。 ○色調：暗褐灰色。
	92	○玉縁の口縁。 ○口縁部は直立する。	○横ナデ調整。	C-2 褐灰色砂泥 ○Ⅲ期 ○胎土：雲母、石英砂多く、少しきめは粗いが良好。しま状を呈す。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：茶褐色。 ○復元口径：55.4cm
	93	○玉縁口縁が下方に発達し稜線をもつ。 ○口縁部はやや外反気味に立ち上がる。	○横ナデ調整。 ○体部内面に目の細かい刷毛目。	B-3 土壌2 ○Ⅳb期 ○胎土：きめ細かい。 ○焼成：良好。 ○色調：赤褐色。 ○復元口径：51.0cm
	94	○玉縁口縁が下方に発達し稜線をもつ。	○横ナデ調整。 ○口縁部外面に3条の凹線がめぐる。	D-3 ゴミ溜め土壌6 ○V期 ○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：茶褐色。 ○復元口径：62.8cm
95		○横ナデ調整。 ○体部外面に縦方向のナデ。 ○底部周縁に軽い削り。 ○体部内面に粘土接合	B-2 土壌2 ○胎土：1～3mmの石英粒。 ○焼成：良好。 ○色調：褐灰色。	

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕			痕が残り、その下側の面に指頭圧痕。	
	96	<p>○玉縁口縁が下方に発達し稜線をもつ。</p> <p>○口縁部は外反気味に直立する。</p> <p>○体部は内弯気味に立ち上がる。</p> <p>○器壁は経体的に薄い。</p>	<p>○口縁部は横ナデ調整。</p> <p>○肩部内面は指頭圧痕、粘土紐による凹凸が激しい。</p> <p>○体部内面は粗い刷毛及びナデで調整。</p> <p>○体部外面は縦方向の削りと刷毛による調整(横方向の刷毛目もみられる)。</p> <p>○底部から立ち上がってくるあたりの体部外面は指頭圧痕による強い凹みをもつ。</p> <p>○口縁部にはかかる凹線がめぐる。</p>	<p>土壌1</p> <p>○V期</p> <p>○胎土：細かい雲母、長石砂を含み、きめ細かく良好。</p> <p>○焼成：堅く良好。</p> <p>○色調：赤褐色。</p> <p>○復元口径：57.0cm</p>

丹波焼

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	97	○口縁部は外反する。	<p>○内外面に灰釉がかかり光沢をもつ。</p> <p>○口頸部より下はナデ。</p>	<p>B-3 土壌2</p> <p>○胎土：小さな黒斑粒を含むが、きめ細かく良好。</p> <p>○焼成：堅く良好。</p> <p>○色調：緑灰色(灰釉)。茶褐色(下地)。</p> <p>○復元口径：14.6cm</p>
徳利形瓶子	98	○口頸部は直立する。	<p>○内外面に水引きの痕跡が残る。</p> <p>○内外面に鉄釉を施す。</p>	<p>A-3 表土</p> <p>○胎土：きめ細かく良好。</p> <p>○焼成：堅く良好。</p> <p>○色調：茶褐色。</p> <p>○口径：2.3cm</p>
甕	99	○口縁部は外側に水平に拡張し、端部は内弯して丸くおさめる。	<p>○横ナデ調整。</p> <p>○体部内面にかかる指頭圧痕。</p>	<p>D-2 淡茶褐色シルト</p> <p>○胎土：黒色の微粒子(雲母?)を多量に含み、部分的にコーラール状になっている。</p> <p>○焼成：堅く良好。</p>

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕				○色調：茶褐色。 ○復元口径：25.4cm
	100	○口縁部は外側に水平に拡張する。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○横ナデ調整。 ○口縁部端部から体部外面は自然釉をかぶる。 ○口縁部は貼り付け。	CIT-3地域 表採 ○胎土：砂が多く少し荒い。 ○焼成：良好。 ○色調：灰褐色。 ○復元口径：31.2cm
	101		○体部外面と底部の境界付近はヘラ削りの後ナデ。 ○底部外面ナデ。 ○内面は横ナデ調整。	B-2 土壌2 ○胎土：1～5mmの石英粒を含み、外面に8mm×7mmの長石粒を認める。 ○焼成：良好。 ○色調：淡茶褐色。
	102	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。	○口縁外側の端部から内面は横ナデの後、鉄釉を施す。 ○外面は鉄釉の上から暗緑色の釉を流す。	第1トレンチ 灰黄色砂礫 ○胎土：きめ細かい。 ○焼成：良好。 ○色調：暗赤褐色。 ○復元口径：21.0cm
播鉢	103	○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部は三角形状を呈す。	○横ナデ調整。 ○内面にヘラ描き条線。	第1トレンチ 灰黄色砂礫 ○胎土：非常に細かい雲母粒を含み、きめ細かく良好。 ○焼成：堅く良好。 ○色調：明茶褐色。 ○復元口径：35.7cm
	104		○底部との境界付近の体部外面はヘラ削りの後ナデ。 ○体部外面は横ナデ調整。 ○内面にかすかにナデの痕跡。 ○内面の条線はヘラ描き。	A-3 ゴミ溜め土壌18 ○胎土：石英微粒子を多く含む。 ○焼成：やや軟。 ○色調：黄褐色。
	105		○外面横ナデ調整。 ○内面のヘラ描きの条線は底部にまでおよ	第1トレンチ 土壌4 ○胎土：砂粒子細かく良好。

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
			<p>んでいる。</p> <p>○底部周縁に条線を施した後、圏線様に強いナデ。</p>	<p>○焼成：堅く良好。</p> <p>○色調：黄褐色。</p>

瀬戸焼

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
灰釉皿	106	○体部は底部から外反して立ち上がる。	<p>○体部上半から口縁部にかけて横ナデ調整。</p> <p>○体部外面下半から底部にかけてはヘラ削り。</p> <p>○口縁部の灰釉は厚い。</p>	<p>B-2 褐灰色砂泥</p> <p>○色調：淡黄緑色(釉) 黄褐色(下地)</p> <p>○復元口径：23.8cm</p> <p>○高：5.0cm</p>
	107	○体部は外反して立ち上がる。	<p>○内外面とも横ナデ調整。</p> <p>○全面に灰釉を施す。</p>	<p>試掘第1トレンチ 暗黄褐色砂泥(地山直上)</p> <p>○色調：淡黄緑色。</p> <p>○復元口径：26.8cm</p>
	108	○体部は外反して立ち上がる。	<p>○下地は丁寧な横ナデ調整。</p> <p>○残存部全体に灰釉をかぶる。</p> <p>○口縁端部を丸くおさめる。</p>	<p>○B-2 溝1</p> <p>○色調：黄灰緑色(釉)。灰白色(下地)。</p> <p>○復元口径：29.0cm</p>
天目碗	109	<p>○体部は内弯気味に立ち上がる。</p> <p>○口縁端部は外反する。</p>	<p>○口縁端部外面から体部内面上半は茶褐色の釉。</p> <p>他は黒褐色の釉を施す。</p>	<p>溝3</p> <p>○復元口径：8.3cm</p>
	110	<p>○体部は内弯ぎみに立ち上がる。</p> <p>○口縁部は外反する。</p>	<p>○全体に黒褐色釉を施す。</p> <p>○体部下半ヘラ削り。</p>	<p>C-2 褐灰色砂泥</p> <p>○復元口径：11.9cm</p> <p>○二次火を受け、大部分光沢を失っている。</p>
	111	<p>○体部は内弯気味に立ち上がる。</p> <p>○口縁部内面はわずかに外反する。</p>	<p>○口縁端部周辺は茶褐色、体部は黒褐色の釉を施す。</p>	<p>D-4 溝3</p> <p>○復元口径：10.2cm</p>
	112	○体部は直線的に立ち上がる。	○口縁部周辺は茶褐色、	D-5 溝3 上面

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
天目碗		り、口縁端部はわずかに外反する。	その他は黒褐色の釉を施す。	明灰色砂礫。 ○復元口径：11.2cm
	113	○体部は直線的に立ち上がる。 ○口縁部は外反する。	○口縁部周辺は茶褐色釉、体部は黒褐色釉を施す。	F-6 土壌3 ○復元口径：13.0cm
	114		○碗底はヘラ切り。 ○腰部はヘラで直線的にそぐ。 ○削り出し高台。	A-3 表土
	115	○体部は内湾気味に立ち上がる。 ○口縁部は外反する。	○全体に黒褐色釉を施す（茶褐色釉の上に黒褐色釉を施す）。	表採
	116	○体部は内湾気味に立ち上がる。 ○口縁端部はわずかに外反する。	○内外面は部分的に縦方向に茶色釉を施す。 ○口縁端部は茶色、他は黒褐色釉を施す。	F-7 pit 76

須恵質陶器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	117		○内外面とも横ナゲ調整。 ○底部から体部にかけてヘラ削り。 ○貼り付け高台。	B-3 土壌2 ○胎土：砂粒子そろい良好。 ○焼成：軟。 ○色調：灰白色。

染付

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
碗	118	○体部は内湾気味に立ち上がる。 ○口縁部はわずかに外反する。	○釉は内面で0.1mm前後、外面で0.15～0.2mmをはかる。	試掘第2トレンチ 攪乱 ○復元口径：8.0cm
	119	○体部は直線的に立ち上がる。	○釉は薄い。 ○外面に雲花をえがく。	E-5 ゴミ溜め土壌4 ○復元口径：10.8cm
皿	120	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○釉は0.1mm以下で薄い。	E-4 溝3 暗灰褐色砂泥 ○復元口径：10.1cm
	121	○体部は外反して立ち上がる。	○釉は全体に厚く施す。	D-3 ゴミ溜め土壌6

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿		<ul style="list-style-type: none"> ○底は肉厚である。 ○口縁端部は尖がり気味。 ○直口。 	<ul style="list-style-type: none"> ○高台は面取りしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○復元口径：9.0cm ○高：2.4cm

青 磁

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
碗	122	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○体部内外面に虫喰いが認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部外面に蓮弁を施す。 ○全体に厚く釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> A-3 B-3 付近 ○色調：暗黄緑色。 ○貫入あり。 ○復元口径：11.7cm
	123	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面に蓮弁の痕跡が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> D-4 溝3 ○色調：淡緑灰色。 ○貫入の有無不明。 ○復元口径：11.8cm ○二次焼成を受け釉が白濁してわずかに流れる。
稜花鉢	124	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は内弯気味にのび、口縁部で外反する。 ○口縁部は角張る。 ○口縁部は稜花様をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内面に雲気文を施す。 ○体部内面に先の角張った蓮弁を印刻する。 ○全体に釉は厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> 試掘第1トレンチ表土及び埋め土。 ○色調：緑黄色。 ○貫入あり。 ○復元口径：21.8cm
鉢	125	<ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部は外反して変換し、口縁部は内弯気味に直立する。 ○口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部内面にかかる蓮弁を施す。 ○釉は非常に厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1トレンチ 灰黄色砂礫 ○色調：緑黄色。 ○貫入なし。 ○復元口径：24.2cm
	126	<ul style="list-style-type: none"> ○底部から内弯気味に立ち上がる。 ○底部は肉厚。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面に蓮弁を施す。 ○碗心には印花文を施す。 ○釉の厚さ0.2~0.3mm。 ○削り出し高台をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○D-2 茶褐色シルト ○色調：淡緑色。 ○貫入なし。
	127	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○高台端部外側は面取りしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部外面下半に圏線をめぐらせる。 ○碗心に印花文を施しそのまわりに圏線がめぐる。 	<ul style="list-style-type: none"> E-5 灰黄色砂礫 ○色調：淡黄緑色。 ○貫入あり。

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢			○碗底は右廻りにヘラ切り。 ○高台は貼り付け。	

白磁

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿	128	○体部は内湾して立ち上がる。 ○口縁部は外反する。 ○口縁端部を角張った感じにおさめる。	○釉の厚さは0.2~0.3mm。	B-2 溝1 ○復元口径：23.0cm ○貫入なし。

弥生式土器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	130	○口縁端部は上下にやや肥厚する。	○横ナデ。 ○ヘラ掻き斜格子文を施す。	表土 ○胎土：砂粒を多く含む。 ○焼成：良好。 ○色調：淡赤褐色。 ○復元口径：19.7cm

遺物実測図
および
図版

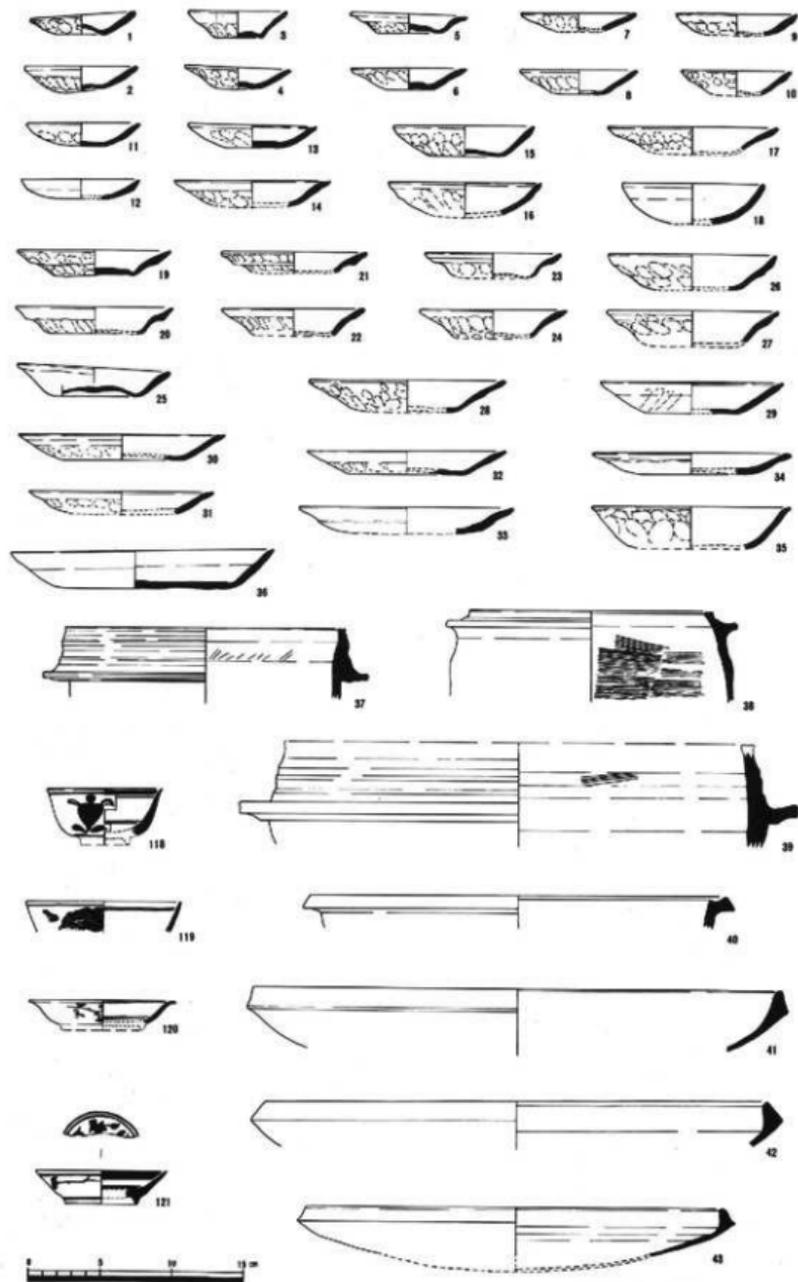
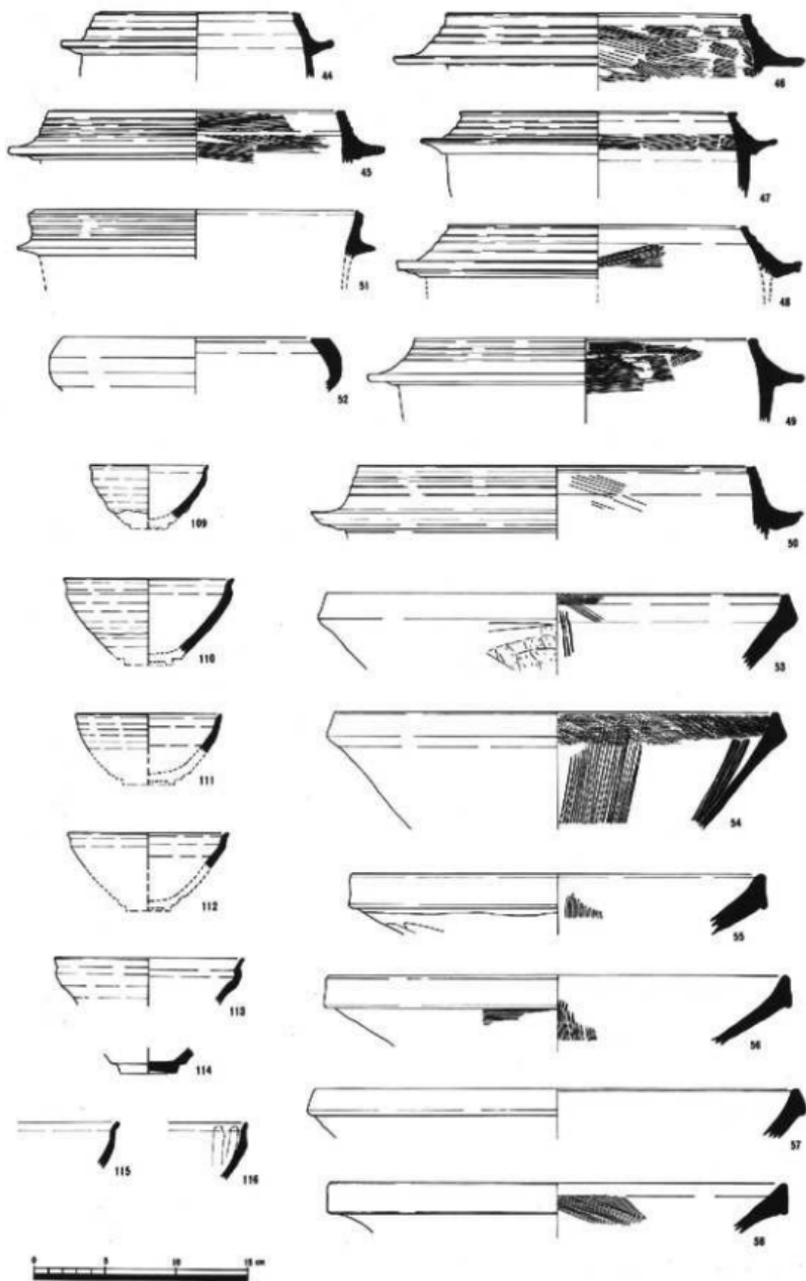


图7 瓦質土器・天目



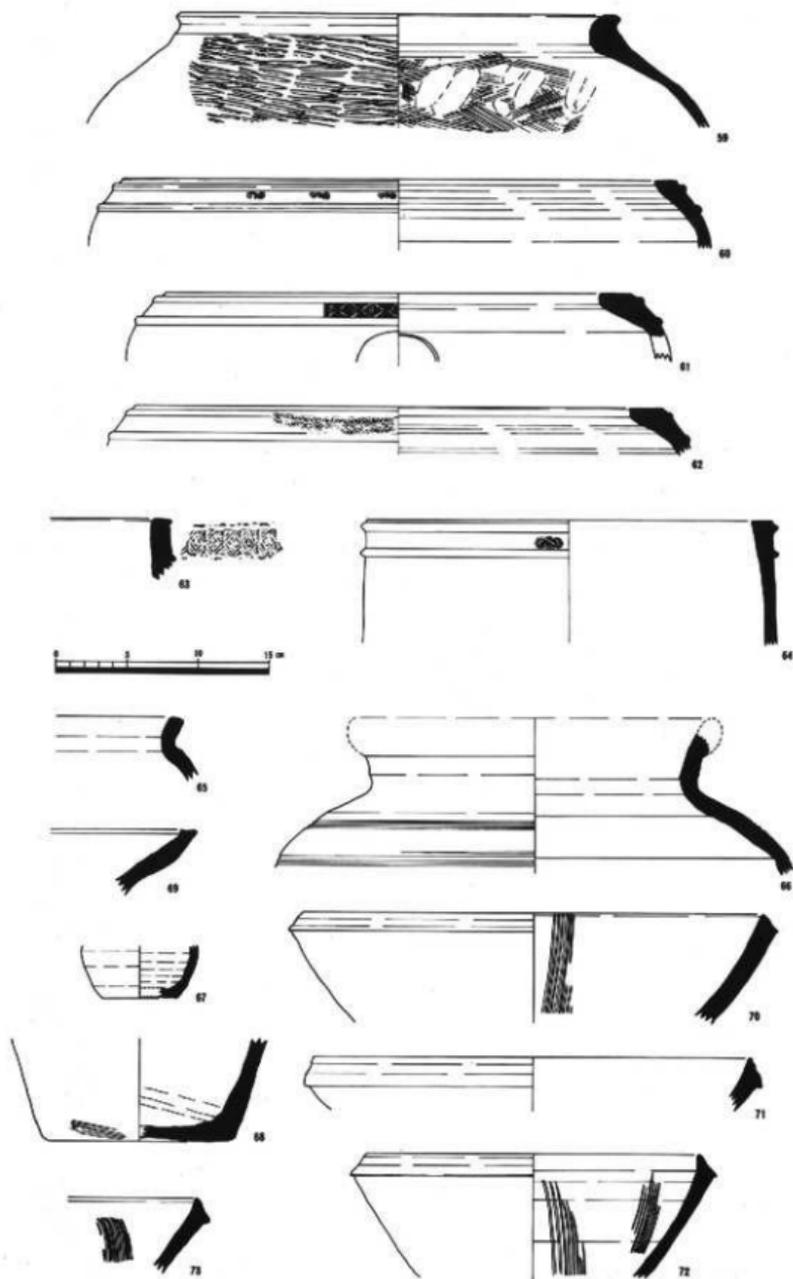


图 9
陶器

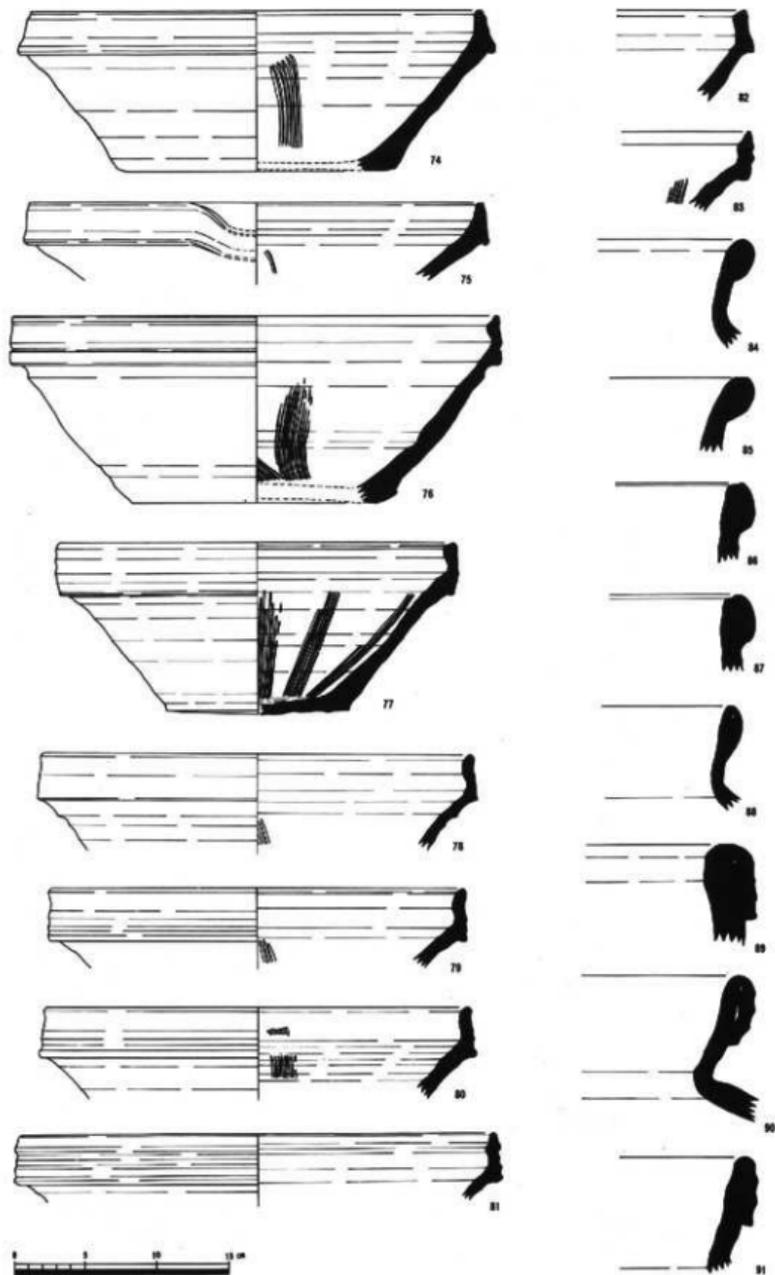
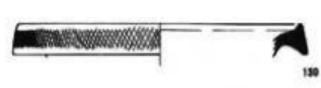
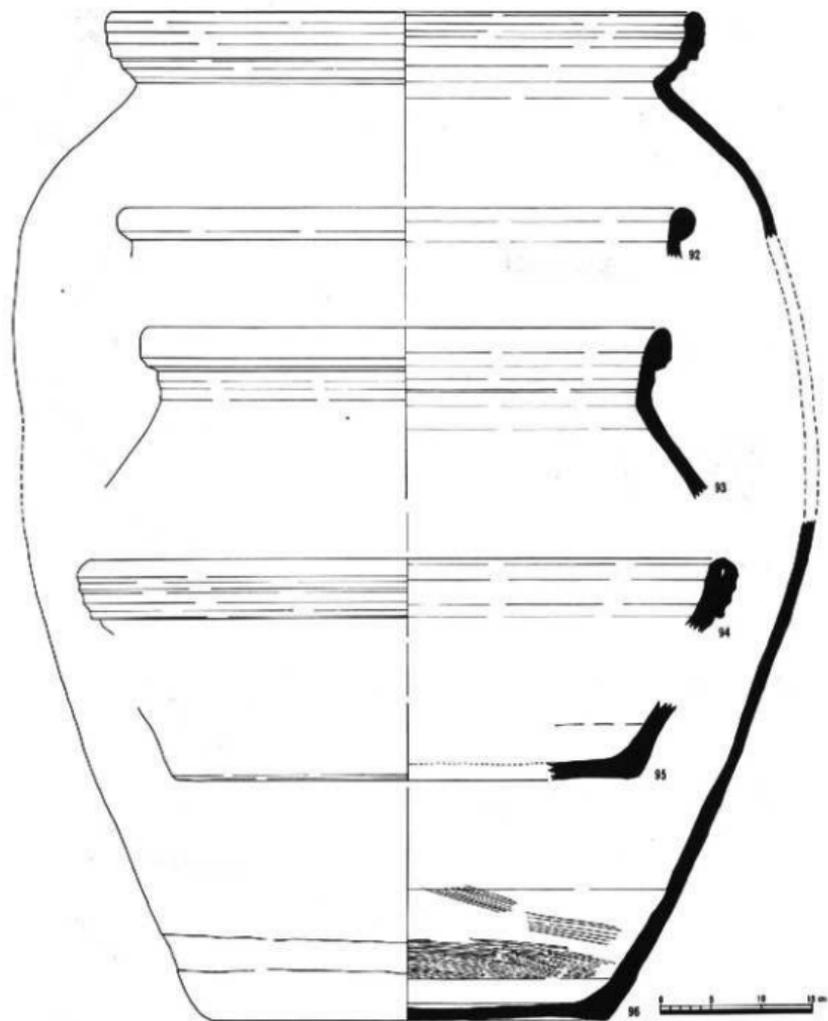
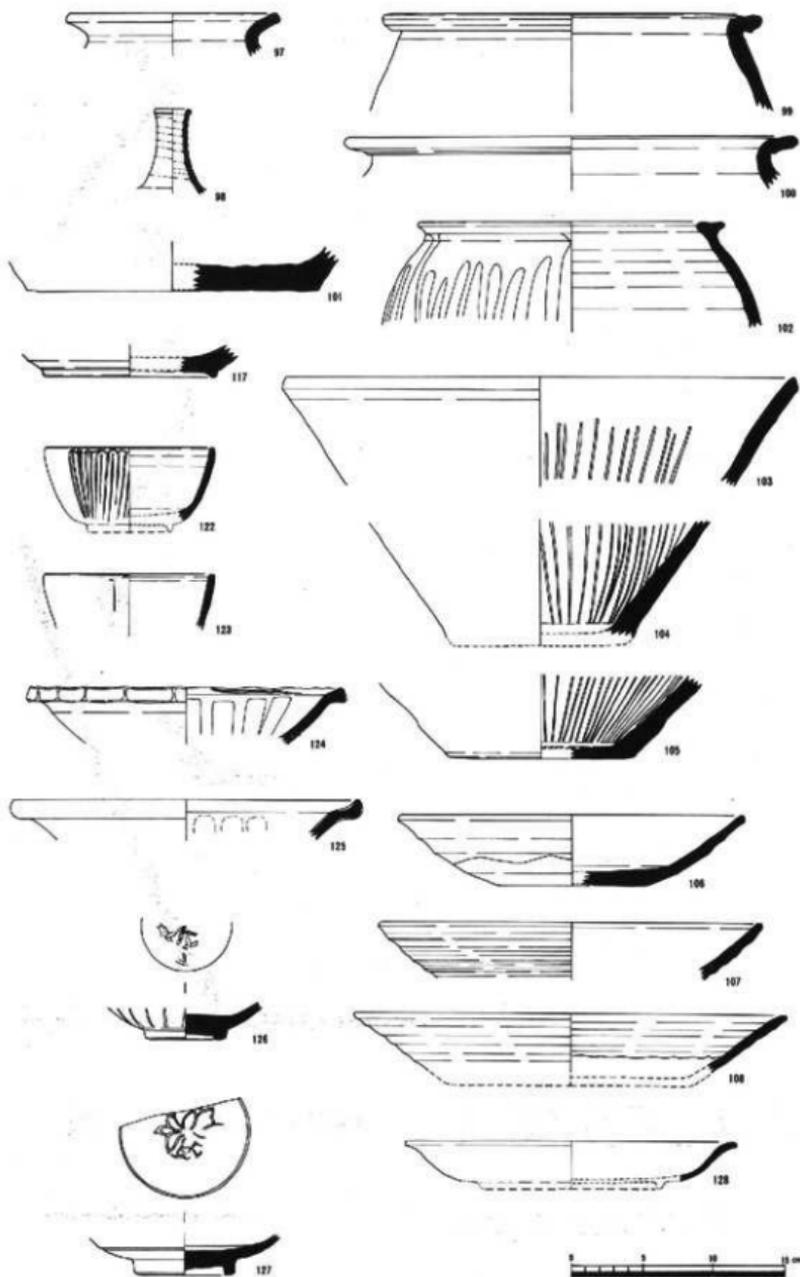


圖10 陶器・金屬製品・弥生式土器







伊丹城惣構え航空写真（1975. 8）
（伊丹市建設部提供）



発掘地区全景（北より）



第1トレンチ全景（西より）



建物-1 全景（東より）



建物-1 瓦埴利用の基礎



土坑—1 備前焼大甕



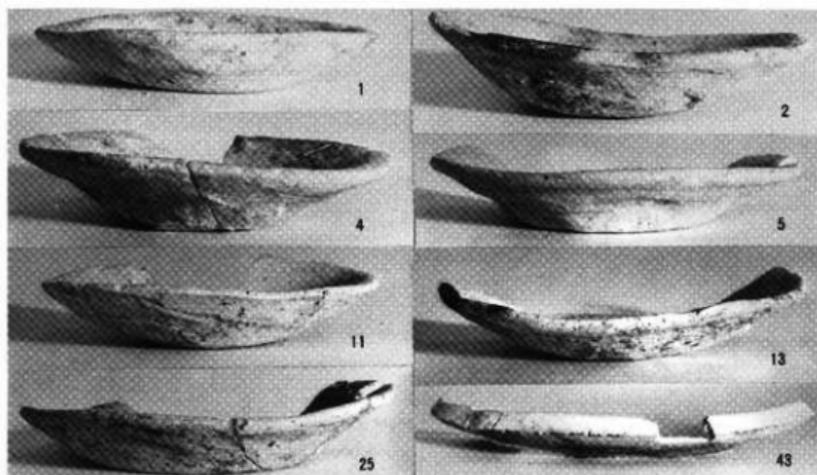
土坑—1 備前焼大甕



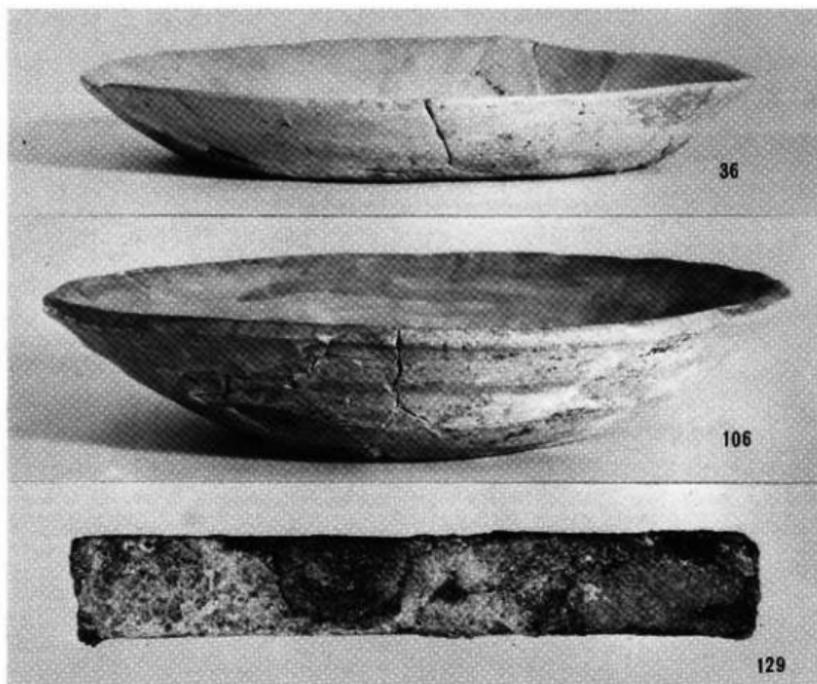
溝-3・4 (西より)



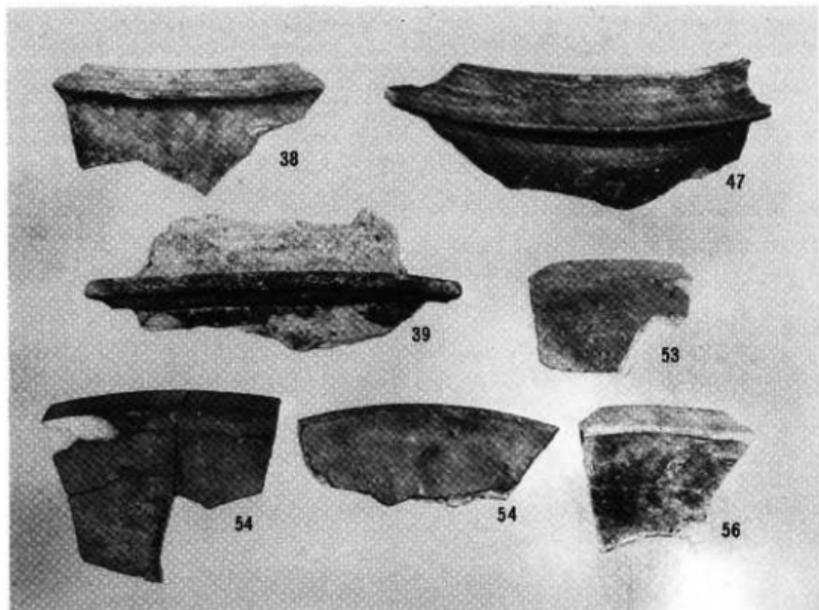
溝-3・4 断面 (東壁)



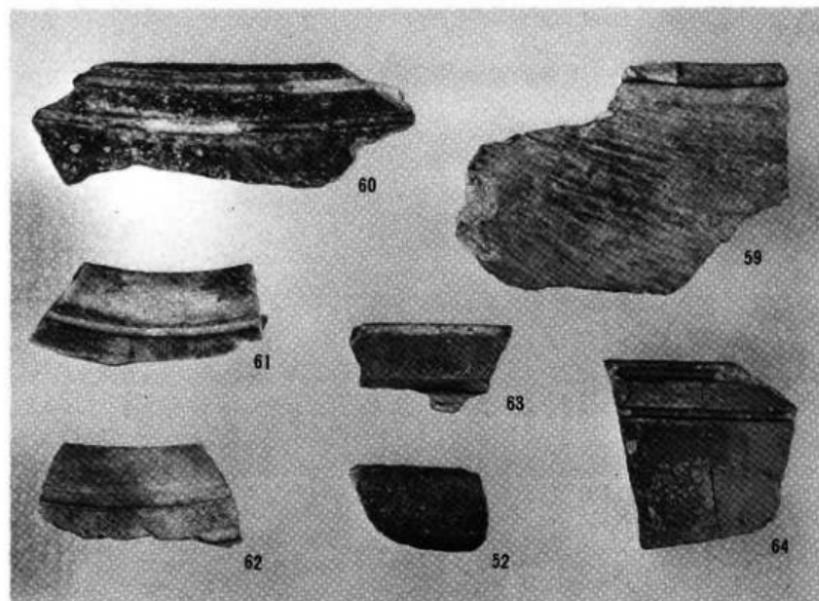
土師質土器 皿、浅鉢



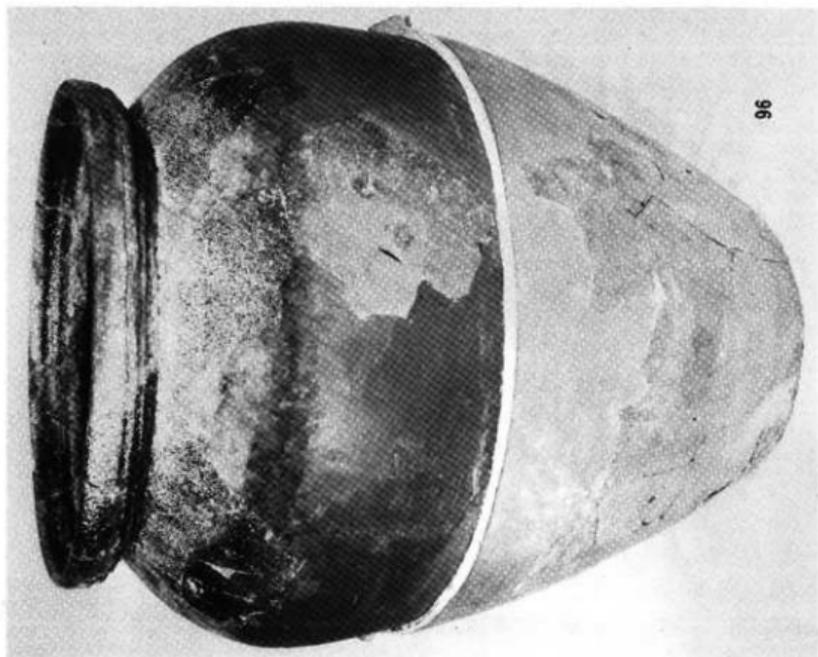
(上) 土師質土器 皿
(中) 瀬戸焼 灰釉皿
(下) 小柄の柄



土師質土器 羽釜 瓦質土器 羽釜、播鉢



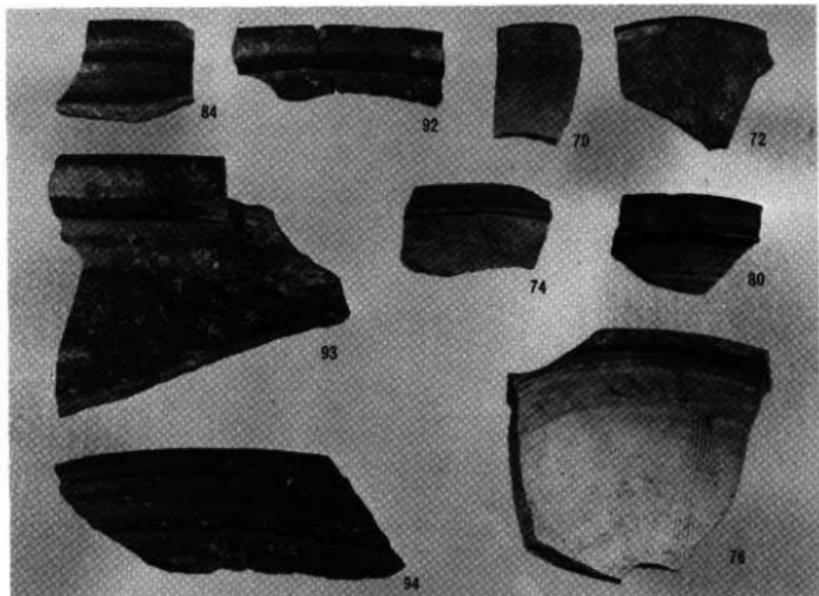
瓦質土器 火舎、甕、鉢



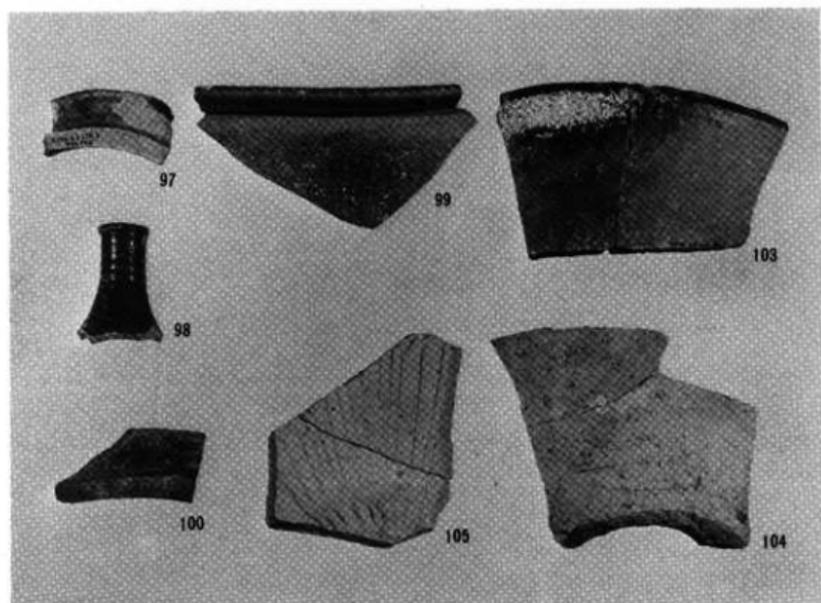
備前焼 甕



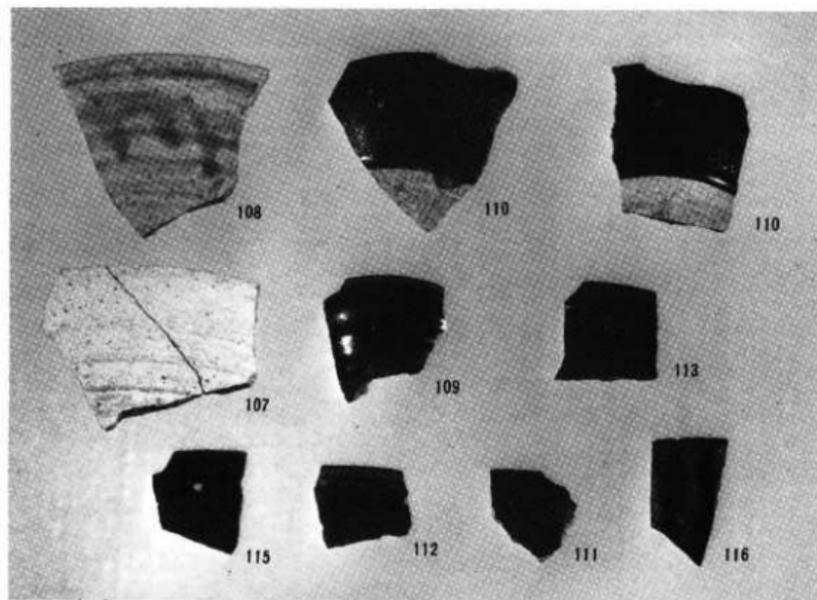
備前焼 楕鉢



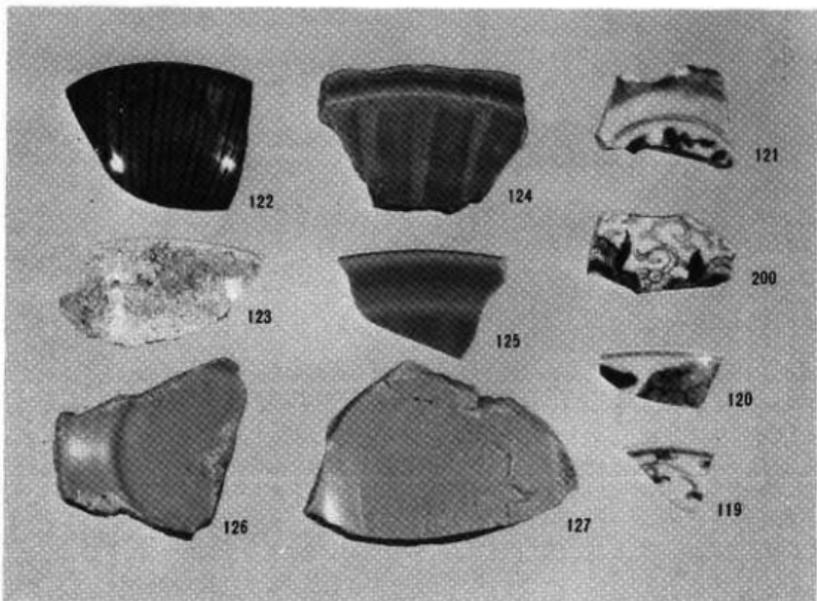
備前焼 甕、播鉢



丹波焼 甕、甕、播鉢



瀬戸焼 灰釉皿、天目碗



青磁・染付

伊丹市文化財調査報告 第10集
伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ

昭和54年 3月31日

編 集 伊 丹 城 跡 調 査 団
発 行 伊 丹 市 文 化 財 保 存 協 会

〒664 伊丹市千僧1丁目1番地
TEL. 0727 (83) 1 2 3 4

